



うけつがれるもの

りゅうこくブックス
137

龍谷大学宗教部

うけつがれるもの

龍谷大学「建学の精神」

龍谷大学の「建学の精神」は「浄土真宗の精神」です。

浄土真宗の精神とは、生きとし生けるもの全てを、迷いから悟りへ転換させたいという阿弥陀仏の誓願に他なりません。

迷いとは、自己中心的な見方によって、真実を知らずに自ら苦しみをつくり出しているあり方です。悟りとは自己中心性を離れ、ありのままのすがたをありのままに見ることのできる真実の安らぎのあり方です。

阿弥陀仏の願いに照らされ、自らの自己中心性が顕わにされることにおいて、初めて自己の思想・観点・価値観等を絶対視する硬直した視点から解放され、広く柔らかな視野を獲得することができるのです。

本学は、阿弥陀仏の願いに生かされ、真実の道を歩まれた親鸞聖人の生き方に学び、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間を育成します。このことを実現できる心として以下5項目にまとめています。これらはみな、建学の精神あってこそその心であり、生き方です。

すべてのいのちを大切にする「平等」の心

真実を求め真実に生きる「自立」の心

常にわが身をかえりみる「内省」の心

生かされていることへの「感謝」の心

人類の対話と共存を願う「平和」の心

目次

浄土真宗の源流

佐々木義英 5

葬儀にお坊さんは要らない!?

— 元葬儀スタッフ僧侶が語る裏話 —

三ヶ本義唯 29

地上最大のロボットと阿弥陀仏

く知り尽くすことと慈しむことく

井上善幸 55

病院で活動する宗教者たち

打本弘祐 69

「マトリックス」の世界 — 唯識無境について —

早島 慧 95

法然と親鸞…二人の功績を考える

平岡 聡 117

龍谷大学宗教部は、大学内外からお招きした講師の講話・講演を活字化し、「建学の精神」を普及し体現するために『りゅうこくブックス』を刊行しております。

宗教部主催の法要・講演会には以下のようなものがあります。

- ・ 授業期間中 毎月十五日 深草学舎 顕真館にて お速夜法要
- ・ 授業期間中 毎月十六日 大宮学舎 本館にて ご命日法要
- ・ 授業期間中 毎月二十一日 瀬田学舎 樹心館にて ご生誕法要
- ・ 毎期一回水曜日 顕真アワー
- ・ 五月二十一日 降誕会
- ・ 十月十八日 報恩講
- ・ 公開講演会 など

ブックスを講読していただくとともに、可能であれば各会場にもおまいりくださいませ。

二〇二三年五月二十一日 降誕会法要 瀬田学舎

浄土真宗の源流

佐々木義英

(本学 非常勤講師)



佐々木 義英 (ささき ぎえい)

- 1963年 滋賀県生まれ。
1990年 龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻博士後期課程 単位取得
龍谷大学講師 (至現在)
浄土真宗教学研究 研究助手
1993年 浄土真宗本願寺派宗学院 卒業
1998年 浄土真宗教学研究 研究員
2000年 中央仏教学院 学校教育部講師 (至現在)
浄土真宗教学研究センター 研究員
2003年 中央仏教学院 通信教育部講師 (至現在)
2008年 浄土真宗本願寺派司教 (至現在)
2012年 浄土真宗本願寺派総合研究所 上級研究員
2015年 浄土真宗本願寺派総合研究所 教学伝道研究室長 (~2023年)
2017年 龍谷教学会議 事務局長 (~2021年)

【著作・論文 (抜粋)】

- 『曇鸞浄土教の研究』『曇鸞の五念門行についての一試論』(共著 / '08年)
『親鸞浄土教の研究』『曇鸞の浄土観構築の論理』(共著 / '09年)
『顕浄土真実教行証文類の背景と展開』『教行信証』の思想背景としての『往生論註』
(共著 / '12年)
『入出二門偈頌講読』(単著 / '14年)
『なるほど浄土真宗』(単著 / '15年)
『安居仰合記』『真宗実践論の一考察 (二種深信論を契機として)』(/ '16年)
『慈光法喜 (武田龍精教授喜寿記念論集)』『真実と虚構の挟間 (Post-Truthをめぐって)』
(共著 / '17年)
『浄土真宗総合研究 (第14号)』『AI技術の光と影 (科学的視点と宗教的視点の近似性と独自性)』
(/ '20年)
など。

はじめに

皆さんおはようございます。佐々木と申します。瀬田学舎には講義で寄せていただいておりますが、夕方の講義でしたので、樹心館に入るのは初めてです。立派な建物で素晴らしいですね。今日は降誕会法要です。降誕会は親鸞さまの御生誕をお祝いする法要です。時を同じくして、西本願寺では慶讃法要が開かれております。今日のご満座です。このような記念すべき日に皆さんと法要を勤修できますこと、ありがたいことであると思っています。

今日は、歴史にして二五〇〇年、距離にしますと一万数千キロに及ぶ浄土真宗の流れについてお話ししたいと思います。皆さんが「親鸞聖人」と聞いて想起されるのは「浄土真宗の開祖」ということでしょうか。親鸞さまは西暦一一七三年から一二六二年までご存命でした。時代という鎌倉時代です。日本史の教科書には「鎌倉時代に親鸞が浄土真宗という宗派を開いた」という風にしてあります。この記述は、間違いではありませんが、実は正確でもありません。

親鸞聖人と法然聖人

親鸞さまには師匠がいらっしやいます。親鸞さまより四十歳ほど年上の方で、法然さまという方です。四十歳といえますと、お爺ちゃんと孫ぐらい年が違います。親鸞さまは法然さまから、阿弥陀仏のおこころ、浄土真宗の教えをお聞きになりました。

法然さまは、幼少期に非常に悲しい事件に遭遇されています。お父さまが騒乱に巻き込まれて、幼い法然さまの前で殺されてしまうのです。その時、お父さまは、

恨みを恨みで返してはならない。恨みは繰り返すだけである。

と言葉を残し、阿弥陀仏がおられる西方に向かって手を合わせ、亡くなられたのです。幼い法然さまは、このような悲惨な経験をされ、やがて出家を決意して、比叡山で自力の厳しい修行をされました。この世で、自らの欲望を断ち切り、清らかな心を得て、さとりを開こうと修行をされたのです。

しかし、どう頑張ってみても、お父さまを殺された恨みや悲しみはもちろん、自らの欲望を拭いきれないのです。そうした中、ある聖教に記されている教えに出遇われ、それが機縁となって、法然さまは比叡山を降りる決意をされました。そして、京都の東山に草庵を建てて、お念仏の教えを喜ばれるようになられたのです。

法然聖人と源信和尚

聖教を通して、法然さまに阿弥陀仏のおこころ、浄土真宗の教えを伝えられたその方は、法然さまの時代よりも、もう二百年昔、今から千年前の比叡山で阿弥陀仏のおこころを喜んでいらっしやった方です。

千年前は京都が日本の首都でした。平安京の時代です。平安京は今の京都ほど広くありません。北は一条通りから南は九条通り辺りまで、東は木屋町ぐらいから西は葛野大路ぐらいまででしょう。うか。

皆さん、紫式部という名前はお聞きになったことありますね。紫式部は『源氏物語』を書いて

います。その中に、宇治を舞台にした「宇治十帖」というものがあります。その中で、浮舟というお姫さまを助ける比叡山の心優しい僧侶として描かれているのが、その僧侶なのです。それほど、当時の京都の市井の方々に愛されたお坊さんです。その方の名を源信和尚といいます。

源信さまは比叡山の一番奥の横川というところでお念仏の教えを喜んでいらっしやいました。そして、非常に親孝行な方でした。お父さまは早くに亡くなられています。奈良県のお生まれで、小さい頃からいつもお母さまに連れられて、当麻寺というお寺に通われていました。当麻寺には「当麻曼荼羅」という国宝の大きな曼荼羅があります。今はプロジェクターがありますが、昔は電気などありませんので、お経の内容を絵図に描いた曼荼羅で絵説きが行われていたのです。

雨上がりのある日、お寺のご法座が終わり、お母さまと源信和尚が帰路につくと、お坊さんが小川でお弁当箱を洗っていました。雨上がりですから、川の水は濁っています。それを見た幼い源信さまは、このようにいわれました。

お坊さん。その川の水は濁っています。そちらで洗われるよりも、こちらの川の方が澄んでいます。こちらで洗われたら如何でしょう。

幼い源信さまは優しい気持ちから仰ったのですが、そのお坊さんは、

僧侶は、汚れているとか、清らかであるとかということの問題にしない。浄穢不二じょうたいふじである。

こういい返されたそうです。源信和尚は何とお返事されたでしょう。皆さんも考えてみてください。幼い源信さまはこのようにお答えになりました。

浄穢不二であるのなら、弁当箱は洗わなくていいはずですよ。

そうするとお坊さんは「これは一本とられた」と思い、別の問いを發したのです。

一から十まで数えることができるか。数えてみなさい。

といたしました。幼い源信和尚は、

一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、十。

と数えて見せました。

よし、数えることができたな。それでは、どうして「十」にだけ「つ」が付かないのか。

皆さんはどう思いますか。なんで十には「つ」が付かないのか。幼い源信和尚はすぐ答えました。うです。

五にはへつゝが二つ付いているからだ。

これは、実話かどうかは分かりません。けれども、源信和尚の聡明さを物語っているわけです。お坊さんはこの答えを聞いて、

この子は非常に頭が優れている。お母さん、この子を比叡山に出家させなさい。

とお母さまにいいました。

比叡山は最高峰の学舎です。全国からエリートのお坊さんが集まってきました。そして、比叡山には中国から新しい聖教や書籍がどんどん輸入されてくる。比叡山の経蔵というお経の蔵には、膨大な聖教が収められていました。

そこに、源信和尚は、小学生ぐらいの年で学びに行かれることになりました。一番お母さまに甘えたい時期に、お母さまの元を離れて修行に行かれるわけです。お母さまに会いたくて仕方ありません。しかし、お母さまは、

あなたが尊い僧侶になるまでは、決して比叡山から下りてきてはならない。

といって、突き出したのです。お母さまも寂しい気持ちを抑え、源信さまを比叡山に行かせるわけです。そして源信和尚は懸命に修学に励まれるのです。そして、高校二年生ぐらいの頃、な

んと源信さまは比叡山のお坊さんに教義を教える先生にられました。

そのことは、当時の宮中にも聞こえ、天皇さまは「是非、宮中に来てお話をしてほしい」と比叡山に依頼しました。そうして、源信和尚は宮中のご法座でお話をされたのです。案の定、源信さまはとてもありがたいお話をなさって、喜ばれた天皇さまは、手に余るほどのご褒美を源信さまに持たせて帰らせました。しかし、源信さまが帰る先は比叡山ですから、贅沢品を持ち帰るわけにはいきません。源信さまはそれらを全部、田舎のお母さまの元に贈られました。しばらく経って、お母さまからお手紙が届いたのです。皆さんは、どういう内容のお手紙だったと思いますか。「あなたは天皇さまに褒められるぐらいの立派な僧侶になったのですね」とお褒めのお手紙が来たのではないかと普通は思いますね。これが実は逆なのです。お母さまからの手紙には、

この母の苦しみを救ってくれる尊い僧侶になって欲しいと思って比叡山に送ったのに、世渡り上手な坊主になってしまったのか。

という内容の手紙だったのです。源信和尚とお母さまのやり取りは記録に残っています。源信

和尚は、そのお手紙を涙しながらお読みになりました。そして、源信さまは朝廷からもらった称号を返上し、比叡山の奥地にある横川に居して、ひたすら仏道修行に励まれました。一度頂いた称号を返すということは天皇さまの顔に泥を塗るということです。下手をすれば命にかかります。それを覚悟で、源信さまは返されているのです。

その後、源信さまは、お母さまが高齢になり、いよいよ今生の別れが来るかもしれないと思いつち、お母さまの元へ行こうとされました。そうすると、その源信さまのところへお母さまのお世話をなさっていた方が来られました。源信さまが「どうされましたか」とお伺いになると、

お母さまのご往生の日が近づいてまいりました。それをあなたに伝えるためにやってまいりました。

というではありませんか。それを聞いた源信さまは、お母さまのもとへ急がれました。病床に横たわっていらっしやるお母さまを抱き上げ、比叡山で学ばれていた阿弥陀仏の教えをお母さまにお説きになりました。その言葉を聞いたお母さまは、安心したご様子であったといえます。そ

して、その後、ご往生されたのでした。

比叡山に戻られた源信さまは、生涯、名誉や役職を固辞し、ひたすらお念仏の教えと母との約束を守られたのです。名声を捨て、お念仏の教えに生きていかれたのです。紫式部は、そのような源信さまの生き様に心打たれ、『源氏物語』の中に、「横川の僧都」として、心優しい源信さまの姿を書き記しているのです。

源信さまがご往生されてから百年、二百年経っても、源信さまを慕う比叡山のお坊さんたちは横川に足繁く通われて、お念仏のご法座を開かれました。法然さまも親鸞さまも、源信さまがかつて居られた所で阿弥陀仏の教えを聞いていらっしやるのです。ですから、法然さまも親鸞さまも、源信さまを通して阿弥陀仏のおこころ、浄土真宗の教えに触れられていたのです。

源信和尚と善導大師

では、その源信さまは、誰から浄土真宗の教え、阿弥陀仏の教えをお聞きになったのでしょうか。話は日本の中だけでは終わりません。日本海を渡って中国に至ります。中国に善導大師とい

うお坊さんが居ます。西暦でいうと六一三年から六八一年頃のお方です。その頃は、日本では奈良時代です。善導大師は沢山の聖教をお書きになっています。その聖教が比叡山の経蔵の中にあり、その善導大師のご文を見て喜ばれたのが源信さまだったのです。

善導大師は非常に多彩な方でした。仏前の作法、お勤めの仕方、そういった事についてもお書きになっていきますし、お経の解説書もお書きになっています。源信和尚がお母さまと通われている当麻寺の曼荼羅、その起源が善導大師ともいわれています。善導大師はお経の内容を図に描いて、あちこちで阿弥陀仏のお浄土のはたらき、阿弥陀仏の教えを説いて回られていました。

曼荼羅って大きいんですよ。一間半ってわかりますか、畳一帖半分ぐらいの大きさです。破れたら描き直し、あちこちでお話をして回られた。そして、お経を一万人以上に書き写して与えられています。そうやって、精力的に阿弥陀仏のおこころを伝えていらっしやいました。

どうして善導大師がこんなに精力的に動かれたのかというと、これにも理由があります。善導大師にもお師匠さんがいました。五十一歳も年上のお師匠さまです。曾祖父とひ孫くらい年が離れています。当時、善導大師は可愛いお弟子さんだったのです。善導大師の師匠のお名前を道綽禅師といいます。

善導大師と道綽禪師

道綽さまがいた時代は五六二年から六四五年です。日本でいうと、かろうじて奈良時代にかかる位の時代です。戦乱の時代、北斉という国にお生まれになりました。道綽さまは大変な苦勞をされていらっしゃいます。一生涯のうちに国籍が四度も変わりました。

中国には大きな川がありますね。長江とか黄河とかは何千キロという川です。道綽さまは河口沿いに住んでいらっしゃいました。大きな川で洪水が起ると国土の三分の一ぐらいが流されてしまいます。道綽さまが幼少期の頃、大洪水が起り、亡くなった人を葬る人の姿さえもなく、生き残った人にとってわずかに残った穀物ですら、大量のバツタやイナゴが空から飛んできて食べ尽くし、飢饉が襲います。そして、疫病が流行していたのです。

道綽さまは、国の存亡に拘わる悲惨な状況に置かれていらっしゃったのです。そのような中、道綽さまは人々の心の支えになりたいと出家の決意をされます。そして、決意をしていざ僧侶になると、今度は隣にあった北周という国に攻められ、国が滅ぼされてしまいます。加えて仏教は激しく弾圧されました。中国で何度かあった弾圧の中でも、非常に激しいものでした。お寺とい

うお寺は潰され、経典は焼かれ、仏像は壊されました。僧侶は還俗、つまり僧侶の資格を剥奪されて一般の人間に戻され、兵役に処されました。お坊さんが兵隊になって人を殺せるわけがありません。何百人、何千人、何万人という僧侶が命を失ったのです。

その北周は一代で滅びます。その後にはできた国が隋です。隋は一転して仏教の復興に力を入れます。その時、新しく作られたり直された仏像の数は十三万数千点に及んだと記録されています。ものすごい数です。今、浄土真宗本願寺派のお寺は全国に一万数百カ寺あります。その十三倍の仏像が北周の時代に潰されたということです。どれだけ北周の仏教弾圧が苛烈であったのかを物語っています。その隋の後、中国全土に黄金時代が到来します。これが唐の時代、大唐時代ともいいます。長く安定した政権です。

道綽さまは、壊された故郷のお寺に行かれます。もう一度、そこにお寺を再興し、阿弥陀仏の教え、浄土真宗の教えを一から勉強されるのです。その時、山門を叩いたのが五十一歳年下のひ孫のような弟子、善導大師だったのです。

善導大師は師匠の道綽禅師から多くの話を聞いて、師匠の苦勞を一身に背負い、師匠が往生されてからも、その思いを晴らさんばかりに、数多くの聖教を書かれました。また、中国には有

名な三つの石窟があります。敦煌莫高窟、龍門石窟、そして、雲崗石窟です。善導大師は、その内の龍門石窟の大仏造営のための現場監督もされています。このように、絵を描き、お経を写し、大仏の造営をし、恩師の思いを一身に背負ってあちこちで仏教の教えを広められたのです。

道綽禪師、善導大師の教えは、日本海を渡って比叡山に伝わり、源信さま、法然さま、親鸞さまへと繋がっていくのです。

道綽禪師と曇鸞大師

では、道綽さまはどなたから教えを聞かれたのでしょうか。道綽さまが再興を誓われたお寺に石碑が残っていました。その石碑に、ある方が阿弥陀仏のおこころ、浄土真宗の心を刻んでおられたのです。道綽さまは、その石碑に刻まれたご文を通して、阿弥陀仏のおこころ、浄土真宗の教えを受け継がれたといわれています。もちろん、石碑は壊されたり倒されたりしていたのでしようけれど、石ですから燃やすことはできなかつたのです。その石碑を刻んだ方が、今から千四百五十年前に活躍なさっていた曇鸞大師という方だったのです。

曇鸞さまが、阿弥陀仏のおこころを喜んで石碑に刻まれていたものが、道綽禪師の故郷にあつたお寺の敷地に転がっていたのです。それを見た道綽禪師は、石碑からそのこころを承けて、お寺を再興されたのです。

曇鸞大師と天親菩薩

曇鸞さまは、ある聖教から浄土真宗の教え阿弥陀仏の教えを聞いて註釈書を書かれています。その聖教の名前が『往生論註』です。「正信偈」をご存知の方ですとお分かりになると思います。その「正信偈」に「天親菩薩論註解」とあります。「註解」というのは解説するという意味ですので、天親菩薩がお書きになった論、聖教を曇鸞大師が解説されたということです。そうしますと、話は中国で止まらず、シルクロードの終着点であるインドにまで及びます。浄土真宗の源流は、インドにまたがる話なのです。

阿弥陀仏のおこころを記されたインドの天親菩薩の聖教が、片道数千キロのシルクロードの旅を経て、曇鸞大師の手に届いていたのです。それを読んだ曇鸞大師は心を打たれ、註釈をされ

ているのです。

皆さん考えてみてください。曇鸞さまは中国の方です。天親さまはインドの方です。勿論、言語が違いますね。そうすると、両方の言語に通じ、翻訳をする人が必要です。そして、片道数千キロ、往復一万余千キロの道中です。本を書いたからちよっとクロネコヤマトさん中国まで届けてくださいとはいかないでしょう。みんな歩いて命がけで行くのです。

少し時代は下りますが、ある僧侶が中国からインドへ仏典を求めて旅をされました。玄奘三蔵というお坊さんです。その方は、中国からインドに至る記録を『大唐西域記』と題して書いていらっしゃいます。余談ですが、『大唐西域記』は『西遊記』の元になった本です。妖怪が出てくるわけではありませんけれども。この中にタクラマカン砂漠のことが書いてあります。日中、五〇度を超え、夜は物凄く寒い。そこを玄奘三蔵は歩いて行くのです。一週間歩いても空を飛ぶ鳥の姿も見えないし、地を這う獣の姿も見えない。ただ目印となるのは髑髏のみ。そんな過酷なところを命がけで歩いていかれるわけです。きっと、多くの修行者たちも命を落としたことでしょう。

インドで記された天親菩薩の聖教が中国の曇鸞大師の手元に届き、曇鸞大師は阿弥陀仏のおこ

ころを喜び、解説書を書かれたのです。多くの無名の人々の命がけの苦勞が、この浄土真宗の系譜の中にあるのです。

また、天親菩薩はとても大きなことをされています。世界最古ともいわれる大学の礎を作られました。ナーランダーという言葉聞いたことがあると思います。これは大学の名前です。下水道もあり、学生が泊まる宿舎もあり、講堂もあります。一階建だけではなく、二階建、三階建の建物もあります。龍大のキャンパスも負けるぐらい広大な敷地に、ナーランダー大学の遺跡が残っています。その大学の礎を築かれた方が、天親菩薩であるといわれています。

天親菩薩と龍樹菩薩

そして、その天親菩薩と並んで、阿弥陀仏のおこころを説いておられた方が、今から一七五〇年前、西暦でいうと一五〇年から二五〇年頃、中インドで活躍をなさっていた龍樹菩薩です。

龍樹さまの時代の遺跡から何が出てきているかというところ、西ローマ帝国の硬貨が出てきています。一七五〇年前、日本は何をしていたでしょうか。今こそ日本は先進国、経済大国と言われる

ますが、当時はインドが先進国です。南インドの王朝と西ローマ帝国とが交易をしていたのです。そして、文明国であったからこそ龍樹さまがお書きになった聖教が残っていると見えるでしょう。龍樹さまがお書きになった阿弥陀仏のおこころ、浄土真宗の教えや、天親菩薩がお書きになった聖教が、シルクロードの旅を経て、中国、そして、日本の高僧方へと伝わっているのです。

龍樹菩薩と釈尊

では、龍樹さまに阿弥陀仏のおこころ、浄土真宗の教えを説かれたのは誰なのでしょう。ヒントは四月八日の誕生日です。そうです、釈尊です。

浄土真宗には大事なお経が三つあります。『仏説無量寿経』『仏説観無量寿経』『仏説阿弥陀経』です。『仏説阿弥陀経』の名前で説明しますと、「阿弥陀」というのは阿弥陀という名の仏さまを表しています。その「阿弥陀」という名の上にある「仏説」の「仏」は誰のことを指しているのかというと、それは釈尊のことを指しています。この三つのお経は、釈尊を通して説き示された阿弥陀仏の教えです。

釈尊は人に応じていろいろな教えを説かれました。その教えの数は、生涯を通じて八万四千あったといわれています。それだけ悩みを持っている人が沢山いたのです。その人その人の苦しみに応じて、さまざまな仏さまを紹介されたといえるでしょう。その中の一人に、

あなたは阿弥陀仏によらなければ、その苦しみは消えません。この阿弥陀仏の教えにしたがってさとりを求めなさい。

と説かれたのです。

では、なぜ釈尊が阿弥陀仏のことをお説きになったのでしょうか。阿弥陀という仏は、最初から仏さまとして居られたわけではありません。私たちも「将来何々になりたい」という目標を見つけて、その目標を達成するために努力しますね。目標と努力は、どちらが欠けても擲揄されます。目標だけ立てて努力しない人は、「あの人は口先だけだ」といわれますし、目標を立てずに動いていると「あの人は何がしたいのか分からない」などといわれてしまいます。私たちが何かを成し遂げようとするとき、目標と努力が二つかみ合って初めて、目標を達成することができます。

仏教では目標のことを「願」といい、努力することを「行」といいます。この願と行が揃って、初めて仏になるのです。そして、仏になる前の段階を菩薩といいます。阿弥陀という仏になれる前は、法蔵菩薩という名の菩薩として願を立てて修行されていたのです。その願が全部で四十八あり、十七番目の願いに、このようなものがあります。

私が将来、阿弥陀という仏になることができたら、この世で自らを律して煩惱を断ち切り、さとりを開くことが出来ないものになり代わって、私があるものを救いと、わたしの浄土で、必ずさとりを開かせる。こうした私がいることを、あちこちの仏がたよ、どうか伝え広めてほしい。

という願いです。これが阿弥陀仏の十七番目の願いです。釈尊は、法蔵菩薩がそうだった願いを立てていらっしゃることをご存知だったのです。ですから、釈尊は、その願いを受けて、阿弥陀仏の教えを二千五百年前に人々に説いていたのです。そして、それが現在の私たちに伝わっているということです。

釈尊と阿弥陀仏

振り返って考えてみますと、浄土真宗の教えを私たちはどなたから聞いているのでしょうか。それは、釈尊を突き動かしている方、阿弥陀仏ご本人ということになります。阿弥陀仏から釈尊を通して、インドの龍樹菩薩、天親菩薩、シルクロードの先にある中国の曇鸞さま、道綽さま、善導さま、そして日本海を渡って源信さま、法然さま、そして親鸞さまへと伝わってきているということです。

今日は浄土真宗の源流と題してお話しをしてきましたが、鎌倉時代に親鸞さまが、突然、浄土真宗という宗派を打ち立てたのではないということです。その源流は阿弥陀仏であるということです。その阿弥陀仏の願いに応じて、釈尊が教えを説き、七人の高僧を経て、親鸞さまに至り、そして、現代の私たちの元に届いているということです。

おわりに

今日は四十五分ほどの短い時間でお話をしましたが、歴史にして二五〇〇年、距離にして一万余千キロの話です。こうして私たちが浄土真宗の教えに出遇っている背景には、壮大な歴史と空間があり、その中でこの法要をお迎えしているということなのです。そのことを、改めて皆さんに思い起こしていただけたら幸いです。お聴きくださいませ、誠にありがとうございます。

【文責宗教部】

二〇二三年五月十六日 ご命日法要 大宮学舎

葬儀にお坊さんは要らない!?

— 元葬儀スタッフ僧侶が語る裏話 —

三ヶ本義唯

(元大手葬儀社勤務葬祭プランナー・本願寺派布教研究専従職員)



三ヶ本 義唯 (みかもと ぎゆい)

1987年 広島県出身

2013年 龍谷大学大学院実践真宗学研究科修了

2013年～2016年

(株)日本セレモニー愛グループ 典礼会館に葬祭プランナーとして勤務

讃 題

先に生まれん者ものは後を導き 後に生まれん者ひとは先を訪え 連続無窮むぎゅうにして 願はくは休止くしせざらしめんと欲す 無辺の生死海を尽さんがためのゆゑなり

〔教行信証〕／『浄土真宗聖典―註釈版―』四七四頁

本日はようこそそのお参りでございます。ご紹介いただきました三ヶ本義唯と申します。簡単に自己紹介をさせていただきます。

私は、山口大学を卒業後、龍谷大学の実践真宗学研究科という大学院に入り、二〇一三年に大学院を修了しました。

その後、大手の葬儀会社に就職し、そこで三年ほど勤務いたしました。

その会社では葬祭プランナーという肩書でお葬儀を担当させていただきました。退職までに三〇〇件以上のお葬儀に関わらせていただきました。

現在は本願寺の布教研究専従職員に属しております、布教専従員としてお役目をいただいで

おります。布教専従員というのは、読んで字の如く、本願寺や本願寺関係の場所で法話をすることを専門にしている職員です。

葬祭プランナー・葬祭ディレクター

先程、葬祭プランナーという肩書を出しましたが、こちらの呼称は会社によって違うものです。仕事内容としましては、電話対応からはじまり、ご遺体の搬送・安置場所の選定・納棺・プランの選定や費用の見積もり・宗教者への連絡・火葬場や役所での手続き・通夜葬儀の会場設営・哀悼ムービーの作成・遺影の手配・司会進行・霊柩車の運転・料理の手配、配膳・香典返しの手配・納骨先の手配・法事の手配・生前の事前相談、などなど多岐に渡ります。

最初から最後まで担当させていただいたご当家は、三年間で約一二〇件ほどでした。大手ですので、お式だけ、打ち合わせだけなどの関わり方もありました。それらを含めると三〇〇件以上になると思います。他のスタッフのヘルプに入ったり、ご法事だけを担当させていただいたりしたことまで含めれば千件を超えます。

私が担当していた地区には五つの会館があり、月に百件ほどのご葬儀がありました。

このような仕事に携わって五年以上勤務実績があると、葬祭ディレクターという資格試験を受けることができるようになります。私の場合は三年の勤務でしたので、残念ながら私はこの資格については持っていません。

葬儀の現場で何か起っているのか？

今日お参りされた皆さんの中には僧籍を持たれた方が多いかと思えます。持たれていない方もおられるでしょうが、今日、こちらにお参りいただいたということは、浄土真宗や仏教にある程度の興味関心を持っていて、ご縁のある方なのでしょう。おそらくは仏式のお葬式について、多少なりとも経験や知識がある方が多いのではないのでしょうか。

今、葬儀の現場ではどのような変化が起きていると思われませんか。

鎌倉新書のホームページに載っていました「お葬式に関する全国調査」によりますと、二〇二〇年時点では、一般的な規模のお葬儀が四八・九%ということで、ほぼ半数が一般的な規模の

お葬儀でした。

今は家族葬という一般の葬儀よりやや小規模なものが増えていまして、一般的な規模の葬儀は二〇二二年には二五・九%まで減っています。お葬儀に関わられる方であれば実感している方が多いでしょう。

家族葬だけではなく、一日葬・直葬・火葬式など、それぞれの定義を明確にすることは難しいのですが、そういった一般的な葬儀よりも小さい規模のものが増えていきます。

特に、現在はコロナ禍の影響もあり全体的に縮小化しています。

世帯構成の変化

そして、もう一つ注目していただきたい変化があります。

それは、世帯構成の変化です。

内閣府が出している令和三年版の高齢社会白書を見えますと、三世代世帯、つまり、おじいちゃん・おばあちゃん世代、お父さん・お母さん世代、孫世代、という三世代がいる世帯のこと

ですが、このような世帯が激減していることがわかります。

五〇年前の一九八〇年には全世帯の半分以上が三世代世帯でした。二〇年前の二〇〇〇年には二六%、二〇一九年には九・四%にまで減っています。今はもっと減っているでしょう。

おじいちゃん・おばあちゃんと暮らしたことがある人が減っているということですから、当然一緒に暮らした身近な人とのお別れを経験した方もまた減っているということです。十人に一人もない計算になりますね。また、多くの人が、おじいちゃんやおばあちゃんがお葬儀やご法事を取り仕切っているような場面を見たことがないということでもあります。

そのために、初めて身近な人のお葬儀を経験するのが、自分の親、お父さん・お母さんのお葬儀、という方が非常に増えています。今は八割・九割がそうなのではないかと思えます。

私が勤めていたのはもうかなり以前なのですが、当時でも、ご自身の親のお葬儀で「初めてのお葬式なんです」と言う方が結構多くおられました。そういう変化を現場では肌感覚で感じていました。

昔は世代間で情報共有されていたお葬儀やご法事などの仏事に関する情報が、今は継承されなくなっています。

ご当家の疑問と質問

そういう状況ですので、ご当家の方々はお葬儀についてのことをほとんど何も知りません。ですから、私は葬儀スタッフとしていろいろな質問を受けてきました。

例えば、「お布施の相場はいくらくらいですか?」「お付き合いのお寺さんがないんですが、どうすれば良いでしょうか?」「無宗教でも良いですか?」「お葬儀のやり方がわかりません」「故人は救われたんでしょうか?」「故人はまだ頑張らないといけないんですか?」などなどです。

この時、私は僧侶としてではなく、あくまでも葬儀社のスタッフとしてご当家の方からご相談を受けていますので、これらの質問の中には立场上「答えられる質問」と「答えられない質問」があります。ピンと来た方もおられるでしょうが、これらの質問には本来なら僧侶が答えなければいけない質問がありますよね。もちろん、実際にはもっと多くの質問がありました。

ご当家の方々からの質問は、僧侶にすべき質問であっても、そのほとんどが僧侶ではなく現場の葬儀スタッフに来ているということなんです。

先程お伝えした通り、お葬儀が縮小化して参列する機会が減少し、世帯構成が変化して、世代

間で仏事に関する情報が継承されなくなっています。しかも、今の人は地域との繋がりも希薄です。誰とも情報共有がされていません。そんな状況ですので、当然、お葬式の手順なんてわかりませんし、お葬儀ってそもそも何なのか、何のためにするものなのかがわからないんです。周りに世話を焼いてくれる人もいませんから、全てを自分で調べて決定しないといけないんです。

そういう状況ですので、ご当家の方は忙しすぎてお葬儀が悲しみに向き合う場として機能していかないことが多いんです。それに加えて、料金設定も不明瞭だったりしますし、困惑したり不安になったりすることばかりが続いていきます。そうなると、「お葬式なんかいらんじやないか」「お坊さんはいらんじやないか」となってしまいうのも、自然なことなのかなと思います。

僧侶の説明責任

そういう現状に対して、私たち僧侶は説明責任を果たしているのでしょうか。あえて、説明責任という言葉を使いますが、今まで多くのお葬儀の現場では、その責任が果たせていなかったの

ではないか、と私は思っています。

そもそも、お坊さんとご当家の方々とのコミュニケーションがありませんので、お葬儀の場が悲しみに寄り添ったり、み教えを伝えたりするような場になっていないことが多いんです。残念ながら、その現状を変えようとか、自分たち僧侶の側が変わろうとしている僧侶は少数派です。

結果として、ご当家の人たちは何が何だかわからない状態で儀式が進行していくという感想を持ってしまいます。目の前で儀式は進行しているんだけど、このお坊さんは何のために来ているのか、ということがわからないんですね。そういう状況ですから、ご当家の目線から見れば、一番親身になってくれたのは僧侶ではなくお葬儀を担当したスタッフなんです。

ご当家の皆さんは、お葬儀についての色々な疑問を持っているんです。でも、その質問を僧侶に聞こうとは思わずに、担当の葬儀スタッフに聞いてこられます。葬儀スタッフも、その質問に対して丁寧に答えようとします。結果的に、お坊さんに対する不信感というものが出てきてしまうんです。

ちなみに、僧侶の皆さん、ご自身の地域でのお葬儀のお布施はいくらぐらい包んでいただいていますでしょうか。結構、大きな金額ですよ。それだけのお金を稼ごうと思ったら、どれだけ

働かないといけないかご存知ですか。こんなことを言うと怒られますが、私がいただいている給料の一月じゃ足りないかも知れません。

それほど金額を包んでいただいているのに、説明責任を果たしていないということになれば、当然ながら包んだ側には不満と不信感が出てきますよね。大金を包んだのに何も説明がないとなれば、「お坊さんって、必要ないんじゃないの?」と思われるのも不思議ではありません。

わからないということを知る大切さ

先程、「僧侶は説明責任を果たしていない」ということを言いました。僧侶の皆さんの中には、「うちはちゃんと伝えている」とか、「そもそも、説明しなくてもみんな知っていることでしょう」と思われている方もおられるかも知れません。今日はそんな方に、ご当家の皆さんの「わからない」という気持ちの一部だけでも体験してもらいたいと思っています。

さて、いきなりですが、ここでクイズをさせていただきます。プロジェクターで二幅の掛軸を

写しています。両方とも仏さまが描かれていますので、ご本尊であることはわかりますよね。

では質問ですが、真言宗のお葬儀で掛けるご本尊はどちらでしょうか。

右か左か、考えてみてください。少し待ちます。

では、左側だと思っ方は手を挙げてください。ありがとうございます。では、右側だと思っ方は。ありがとうございます。右側の方がちよつと多いでしょうか。

さて、答えですが、これは意地悪な質問でして、右も左も真言宗のご本尊であることには間違いありません。

では、何が違うかというと、右側は葬儀の時に掛けるご本尊なんです。十三仏の掛け軸といって、仏さまが来迎してくださっている場面です。普段のお仏壇には左側の大日如来さまだけが描かれたご本尊が掛けられています。枕経から、お葬儀、四十九日の法要までは十三仏の掛け軸を掛けることになっています。

浄土真宗の方が多いので、知らなかった人が多いでしょう。

では、次は浄土真宗のクイズをしてみましょう。

こちらに三体のお木像があります。三体とも阿弥陀様ですね。では、この三体の中で本願寺派のご本尊であるお木像はどちらでしょうか。考えてみてください。

右だと思われる方。真ん中は。左は。なるほど。これを間違ったからどうこうという話ではありませんので、間違っても気にしないでください。

正解は真ん中です。

右は浄土宗、もしくは天台宗のお木像です。左は同じ真宗ですが、大谷派のお木像です。光背の違いがありますね。

ではもう一つ、今度は真宗の御絵像のご本尊です。同じように見えますよね。でも、この二つのうち片方が本願寺派のご本尊です。どちらかわかりますか。

左だと思う方。右だと思う方。ありがとうございます。

左が正解です。

私が葬儀社に入った時は「四十八本ある後光のうち、上の辺に八本接していたら本願寺派、六

本だと大谷派だ」と教えられました。でも、実はこの見分け方は正確ではありません。ご本山から下げていただいた本願寺派のご本尊でも、上の辺に六本接しているものがあるんです。

葬儀社の人は後光の数で判断するものだと先輩から教えられたら、それで判断するしかないんです。

どうでしたでしょうか。全て正解できましたか。私たち本願寺派の僧侶であっても、さすがに真言宗のことはわからないという方が多いですよ。さらに言えば、本願寺派のご本尊についてのことであっても、あやふやなことがありましたよね。

お坊さんでも教わっていないことは知らないし間違っんです。専門家でもそうなんですから、知る機会がなかったご当家の方々はどうでしょうか。どれほどわからないことだらけで、戸惑っておられるか、少しは実感できましたでしょうか。

もう少し実感していただきましょう。私も答えられなかったものです。

「焼香のタイミングは誦誦文が終わった後、次の読経からね」（真言宗）

皆さん、この説明でお焼香のご案内できますでしょうか。私は分からなかったので、上手くで

きずに当時はこっぴどく怒られました。

「いつもは寿量品自我偈からお焼香するけど、今日は御祈念文からしましょうか」（創価学会）
何のことかさっぱりわかりません。

「木鉦はありますか。無かったら持っていきます」（日蓮宗）

木鉦ってなんでしょう。こちらは浄土真宗にはない打物なんです。探しましたけどなかった
ので「木魚じゃダメなのかな」と思ったんですが、やはり正直に返事しようと、「ないです」と
返事しました。そうしたら、やって来た日蓮宗のお坊さんがカバンから木魚を出してきたんです。
「いや、どっちゃやねん」と思いましたけどね。つまりは教えてもらったことがないことは何が何
かわからない。当たり前のことですよ。

ところで、浄土真宗の僧侶の皆さんは葬儀社のスタッフにこんなことを言ったことないでしょ
うか。

「お焼香はいつも通り、五劫思惟からでお願いします。」

心当たりありませんか。

わからないことって、このレベルのことなんです。「五劫思惟からで」と言って焼香のタイミ

ングが相手に伝わるということは実は凄いことなんです。葬儀社のスタッフが浄土真宗について学んでいるから通じていることなんです。

じゃあ、知らないで間違えたらどうなるかと言うと「だから枕経の時に一刻も早く十三仏を掛けるって何度言ったらわかるんだ！」って怒られるんです。大切な儀式のことですから、間違ったら怒られるんです。大切ならちゃんと教えてくれれば良いんですが、僧侶の皆さんは「そんなことは当然知っていること」という前提で話をしてしまっただけで、それが間違っていたら否定から入ってしまう。こういうこと、良くあります。

浄土真宗でご当家から良くある質問は、魂についての質問とか、仏壇に水を置かないとか、ご冥福は祈らないとか、ですね。これらは私たち僧侶にとっては聞きなれたことです。でも、普通の人は知らなくて当然のことです。それなのに、知らない人に否定から入ってしまっていますか。わからないということを知って、ちゃんと答えてあげてほしいと思います。

宗教者に求められていること

僧侶のみなさん、事前に式場のチェックをされていますか。先程、ご本尊が大谷派か本願寺派かと聞きましたが、間違えていた場合にご指摘されたことありますか。実はたまに間違っています。葬儀者の方も人間ですから。

勤式作法の練習はしていますか。

ご当家の方とコミュニケーションがちゃんと取れていますか。

こういうことをちゃんとしていないと、ご当家の方の心が離れて、本来お坊さんが答えないといいけない質問が葬儀屋スタッフに流れてきてしまいます。しかも、その質問の中には、スタッフとしては答えられない質問もあります。本来なら僧侶が答えないといいけない質問に、僧侶が答えられないことがあり、ご当家の方々はそれによって困惑しています。

ある時、ご当家の方から「あの人はまだ頑張らないといけなんでしょうか」という質問を受けた

ことがあります。

この質問は、ある僧侶が式の最後に「今、故人様は向こうの世界で頑張っておられます。だから皆さんも頑張ってください」と話した後に、スタッフとして受けた質問です。

ご当家の方から、「あの子はずっと病氣と闘いながら頑張って、七〇歳まで生きることができたのに、死んでからもまだ頑張らないといけないですか」と聞かれました。この質問には、私はお坊さんとして答えたいなと思いました。

こういう疑問が、ちゃんと答えられないままにどこかで止まってしまっているんです。宗教者に求められていることは、こういうことに答えることでしょう。否定から入らずに、寄り添い、答える姿勢が必要だと思います。

葬儀の場で僧侶に求められていることをまとめますと、疑問に対する十分な説明、宗教的な質問への答え、寄り添おうとする姿勢、関係性の構築、そして、儀式・儀礼を滞りなく執行することです。

印象的だった他宗教・他宗派の葬儀

私たち浄土真宗のお葬儀は、他の宗教・宗派と比べて見るとどう見られているのでしょうか。

まず、葬儀の中心になる導師のクオリティですが、浄土真宗以外の宗派の導師と比べてしまいますと、正直なところ見劣りしている場合が多いです。これは、あくまでも平均値としての話です。浄土真宗でも当然凄い人はいます。

しかし、これはしょうがないことだとも思っています。浄土真宗の僧侶になるのに必要な期間と、他宗派の僧侶になるのに必要な期間との間にはかなりの差があります。年単位で違います。他宗派の方々はその期間、修行として勤式作法にどっぷりと浸かっているわけで。単純に考えて、やはり長いほど熟練する人が多いというのは当然のことです。

天台宗や日蓮宗はめっちゃくちゃっこ良いと感じてしまいます。僧侶が登場することで雰囲気変わることを実感します。機会があればご覧になっていただきたいと思えます。

しかし、これは良し悪しだとも思っています。既に、僧侶とご当家との関係性が構築できていれば、問題にならない場合がほとんどです。やはり、ここでもご当家の方と僧侶との関係性の構

築、信頼が大切になります。

ここからは、個人的に印象に残った他宗教・他宗派の葬儀への取り組みを紹介いたします。

とあるキリスト教系の新宗教を担当させていただいた時のことです。あまり聞いたことのない宗派で、その宗派の正装は特徴的で、とても着るのに時間のかかりそうな服でした。ですがその宗教者の方は、私たちで言うところの枕経のようなお勤めに、深夜の2時であつても正装で駆けつけてくださいました。

もちろん、浄土真宗でも同じように駆けつけておられる僧侶の方もおられますよね。いつでも駆けつけてくださるといふのは、ご当家の方にとっては凄く安心感があります。

そして、勤式作法という面では神社神道のお葬儀は凄いです。古くからの神道には明確に大系化された教義がありませんので、儀式によって伝道されているんですね。一挙手一投足に雰囲気があつて凄いと思います。

そして、幸福の科学のお葬儀にも関わらせていただきました。こちらは非常にわかりやすいんですね。ご当家の方に参加する意味をしっかりと説明するというのが幸福の科学のご葬儀です。私

たちの読経にあたるようなものも、聞いてそのまま理解できるような言葉で書かれてあります。そして、創価学会の葬儀です。創価学会の葬儀は参加型で、参列者はほぼ全員が読経できます。浄土真宗の葬儀も、参加型でみんなが勤めるということになってはいますが、実際にはお勤めに参加される方はかなり少ないですね。創価学会ではほぼ全員が参加されています。

葬儀にお坊さんは要らないのか？

色々と脱線してしまいましたが、本題に戻ります。葬儀にお坊さんは要らないのでしょうか。こちらは本願寺の教学伝道センターから出ている『葬儀規範』の解説です。

仏教において「葬送儀礼」というのは、近親者の「死」を通して、遺されたものが故人を偲び、改めて生前の厚情に感謝の気持ちを表す場であり、また、慌ただしい日常生活のなかで、真摯に振り返ることのできなかつた無常の道理を知らされる場でもあります。そして、何より重要な事は、合掌するご縁の無かつた方々に、仏法を聴聞するという機会が訪れていると

いうことです。私たち僧侶は、仏説の内容に立ち返り、入滅の相を示された釈尊のお姿を通して、一人の人間として自らを顧み、また、その場に集う人々にとって「法縁」となるよう勤めなければなりません。

〔葬儀規範〕／本願寺出版社

このように、葬儀の本来の意味に立ち返るならば、浄土真宗における葬儀はあくまでも法縁の場であり、仏様がはたらいてくださっている場所なんです。ですから、僧侶は仏様の邪魔をしないようにしつつ、お葬儀の場が、ご当家の人や残された方々にとっての尊い法縁の場となるように勤めるということが大切なんです。浄土真宗の場合は、僧侶が個人的に頑張るというよりも、既にある過去からの膨大な積み重ねをお伝えすることが大事なのだと思います。

たとえば、その積み重ねの一つが、お通夜やお葬儀で読まれることの多い「白骨の御文章」です。この「白骨の御文章」をしっかりと読まれて、可能であればこの現代語の意味をお伝えすれば、それだけでご当家の方々に響くものがあるんです。

この白骨の御文章は「死」という言葉を直接的には使っていないにも関わらず、非常にリアル

に死というものを表現しています。

この御文章に書かれていることが、まさに現場で、特に枕経の前後で本当に起こるんですね。

無常の風来たりぬれば すなわち二つの眼たちまちに閉じ 一の息ながく絶えぬれば、紅顔
むなしく変じて 桃李の装を失いぬる

これが目の前で起こります。

お亡くなりになられてすぐのお顔は、とても安らかなんです。寝ているのと見分けがつかません。しかし、そこから数時間で顔色が全く変わってしまいます。一目で亡くなっていると分かるような真っ白な顔になるんです。ものすごい変化が枕経の場でリアルタイムに起こります。

そして、私たち僧侶が「白骨の御文章」を通して伝えたいことは、「誰の人も、はやく後生の一大事を心にかけて」という一節でしょう。

大切な人が亡くなって目の前で変化していくすがたをまじまじと見た時に、はじめて主観としてお浄土の必要性を思うことができます。「お浄土って、やっぱり必要なんだな」と。

私自身、仏教の勉強をして、いろいろなことを学んできたと思います。しかし、勉強で聞いているのと大切な方の死の現場で、仏教を味わうというのでは全然違うんです。

先月のことですが、とても親しくさせていただいたご門徒さまがお亡くなりになりました。その方は本当にお聴聞を大事にされて、念仏を大事にされる方でした。その方がお亡くなりになったときに、私は「お浄土があつて良かったな」と心から思いました。「この方はお浄土に行かれたんだ。それで良かったんだ」って思えるんです。そう受け止めている私にとって、お浄土は必要だったんです。

お葬儀の場とは知識として仏教を学ぶのではなく、身近な人の死を通して、我が事として教えを聞いていくご法縁の場所です。先立たれた方が仏様と成られて、最初に私たちにお念仏のご催促をしてくださる場です。その教えは、人から人へと伝わっていきます。

僧侶は、お葬儀の場が大切なご法縁の場となるように、仏様と故人様によるお取次ぎをお手伝いするんです。そこには、僧侶という役割を果たす人間が必要です。私はスタッフとして現場に立たせていただいて、このように思いました。

皆さまそれぞれが、今後の人生においてどのように葬儀に関わっていくのか、一つのご参考と

して今日のお話を聞いていただけたなら幸いです。

肝要は御文章を拝読させていただきます。

白骨の御文章

それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おほよそはかなきものはこの世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。さればいまだ万歳の人身を受けたりといふことをきかず、一生過ぎやすし。いまにいたりてたれか百年の形体をたもつべきや。われや先、人や先、今日ともしらず、明日ともしらず、おくれさきだつ人はもとのしづくすゑの露よりもしげしといへり。されば朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなはちふたつのまなこたちまちに閉ぢ、ひとつの息ながくたえぬれば、紅顔むなしく変じて桃李のよそほひを失ひぬるときは、六親眷属あつまりてなげきかなしめども、さらにその甲斐あるべからず。さてしもあるべきことならねばとて、野外におくりて夜半の煙となしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり。あはれといふもなかなかおろかなり。されば人間の

かなきことは老少不定のさかひなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏をふかくたのみまゐらせて、念仏申すべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

〔御文章〕／『浄土真宗聖典―註釈版―』一二〇三頁

【文責宗教部】

(二〇二三年六月十六日 ご命日法要)

地上最大のロボットと阿弥陀仏
～知り尽くすことと慈しむこと～

井上善幸

(文学部 教授)



井上 善幸 (いのうえ よしゆき)

1971年 山口県出身。

'99年 龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻博士課程
単位取得満期依願退学。

本学講師，助教授を経て，教授に就任。

専攻分野は真宗学。

【著作】

『末灯鈔講述』（永田文昌堂 '22年）

『問答と論争の仏教—宗教的コミュニケーションの射程—』

（共編／法蔵館 '12年）

『行文類』における第十七願の意義について』（『真宗学』139／'19年）

『The Basis of Mahayana : Shinran's Understanding of the One Buddha Vehicle,
the Vow』

（『真宗学』137・138／'18年）

『『末灯鈔』にみられる「他力の中の他力」について』

（内藤知康編『親鸞教義の諸問題』（六角会館研究シリーズ）7／'17年）

など。

讚題

十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし 撰取して捨てざれば 阿弥陀と名づけたてまつる

〔浄土和讃〕／『浄土真宗聖典―註釈版―』五七一頁

ようこそのお集まりでございます。少しばかり時間をいただき、お話をさせていただきます。

本日の講題は「地上最大のロボットと阿弥陀仏 ～知り尽くすことと慈しむこと～」です。このタイトルの聞いて「あのことではないか？」と思われる方がおられるかも知れません。ちょっと手を挙げていただけますでしょうか。わずかにですが知っている方がおられますね。これにピンとくる方は、ある程度年齢層が高い方なのではないかと思えます。

どういふことかと言いますと、実は今日の講題は手塚治虫さんの作品『鉄腕アトム』のエピソードの名前なんです。ほとんどの方が、あまりご存じないということですので、かいつまんで内容を紹介したいと思います。

地上最大のロボット

アトムというキャラクターは有名ですので、皆さんも多少はご存知なのではないかと思えます。子どもの姿をしたロボットです。

アトムを作ったのは天馬博士という天才科学者でした。大変素晴らしい技量と頭脳を持ち合わせた科学者です。この天馬博士は息子のトビオ君を交通事故で亡くしてしまいます。悲しみにくられた博士はトビオ君そっくりのロボットを作り、そしてそのロボットを一生懸命愛そうとします。ところが、いくらそっくりでもロボットはロボットですので、当然ですが成長することはありません。いつまで経っても子どもの姿のままです。

天馬博士はそのことに腹を立ててしまい、そのロボットをサーカスに売り飛ばしてしまいます。この辺りは、心優しいアトムが実は人間のエゴによって作られたという、手塚作品ならではの深味があるところですよ。

やがて、ロボットに関する法律が改正され、感情を持ったロボットは人間と同じように扱おうということになりました。この時に、アトムの可能性に注目していたお茶の水博士がアトムを引き

取ったのです。このお茶の水博士も有名なキャラクターです。鼻が大きくて、頭の横に白い髪がモジャモジャと生えている人です。

お茶の水博士はアトムを引き取り、妹のウランちゃんなどの家族を与えて、人間と同じような暮らしをさせます。

しかし、アトムは十万馬力のパワーを持っていますので、いざ何か問題が起こると、その問題の解決に向けて立ち向かっていくのです。

講題にしました「地上最大のロボット」というのは、この鉄腕アトムの中に出てくるエピソードです。

ブルートゥという地上最大のロボットが、世界最高水準の七体のロボット、七人と言っていると思いますが、その七人を次々と倒していき、やがてアトムとも戦う、というお話です。アトムとの戦いを通してブルートゥ自身にもまた変化が現れます。

PLUTO

今回私がお話をしたのは、実は手塚治虫のオリジナル作品についてではなく、後にリメイクされたリメイク版の話です。リメイクしたのは浦沢直樹さんという漫画家さんです。実写映画化もされた『二〇世紀少年』とか、柔道漫画の『YAWARA』でおなじみの漫画家さんです。

手塚治虫の「地上最大のロボット」は半年ぐらいに渡って掲載されたものですが、浦沢直樹さんのリメイク版である『PLUTO』は足掛け六年掲載されて、コミックスは全部で八巻にも及びます。これだけ連載期間が長いこともあり、内容的に非常に深く掘り下げられた作品になっています。

七人のロボットたちは単に強いだけでなく、皆が人間的な魅力に溢れています。スイスのモンプランというロボットは森林保護を担当し、山歩きや登山の案内役をしています。スコットランドのノース2号は古城で老いたピアニストの執事をしています。寡黙ですが、ピアニストにずっと仕えています。トルコのブランドは、ロボット同士の格闘技の選手です。非常に家族思いでトルコの英雄として知られているロボットです。ギリシャのヘラクレスはブランドのライバル

です。ロボットの格闘技で互いにしのぎを削っている関係です。オーストラリアのエプシロンは太陽光の力を使うロボットです。強大な力を使うことができます。ドイツのデュッセルドルフでユーロ連邦の捜査官、つまり警官をしているのがゲジヒトというロボットで、このゲジヒトが『PLUTO』の主人公です。そして、最後に日本のアトムです。

実は、彼らのほとんどには共通の過去があります。最高水準のロボットは、そのパワーが世界最高水準なのです。現実の国際社会において、そのパワーが何を意味するのかといえば、それはやはり軍事力です。彼らはとある戦争に徴兵され、戦争に参加していました。

オーストラリアのエプシロンは平和主義者としての立場を貫き徴兵を拒否して、戦後、戦災孤児、戦災で様々な苦しみを背負った子どもたちの世話をしています。アトムは見た目が愛くるしい子どもですからアイドル的に歓迎され、戦災で様々な傷を負い苦しんでいる人たちの慰問をしました。残りの、モンブラン、ブランド、ヘラクレス、ノース2号、ゲジヒト、の五人はいつでも兵士として戦争に参加しています。

彼らは強力なロボットですから大量破壊兵器なのですが、ロボット三原則がありますので人間を攻撃するわけではありません。第一原則「ロボットは人間に危害を加えてはならない」、第二

原則「第一原則に反しない限り、人間の命令に従わなくてはならない」、第三原則「第一、第二原則に反しない限り、自身を守らなければならない」という原則です。当然、第一原則が最優先されますので、人間を殺すことはできません。ただ、ロボットが人間同様に活躍する時代の話ですので、彼らが相手にするのは自分と同じロボットなのです。自分自身と同じロボットを、それこそ何千体と破壊していくわけです。

彼らは大量破壊兵器としての力を持つてはいますが、同時に本当に人間に近い心を持っています。自分と同じロボットを破壊した、殺したという記憶や、戦場で見た光景を忘れることができないのです。この五人のロボットは、戦争に参加したことによって、深い悲しみと憎しみを抱えています。

このように悲しみを背負ったロボットたちが、地上最大のロボット、つまりプルートの倒されていきます。ここから話は山場ですので、もっと語りたところなのですが、今からコミックを読む方や、アニメを楽しみにしておられる人もいるでしょう。ですので、こちらへんにしておきます。

憎しみのプルートルウと許しのアトム

とは言え、このままですと話が繋がっていきませんので、浦沢直樹版の『PLUTO』のユニークなところ、肝となるところについて、もう少しだけ紹介したいと思います。

どういふところがユニークかと言いますと、地上最大のロボットであるプルートルウを生み出すキーです。それは「憎しみ」です。実は強烈な憎しみの感情によってプルートルウが生まれました。元々は完璧なロボットを作ろうという計画でした。その完璧なロボットを作るために世界中の全ての人間の思考や感情、性格をシミュレートして、ロボットにインプットしていくのですが、あまりにも情報量が多いので、そのロボットはフリーズしてしまいます。そのフリーズした状態を解決するために、ある一つの感情を注入することで感情に偏りを与えることにしました。そうすると、その偏りが軸となって、情報が統御されていくというわけです。その時に注入されたのが、強烈な「憎しみ」だったのです。その憎しみを原動力としてプルートルウが誕生しました。

では、そのプルートルウに対するアトムはどう戦うのか。手塚治虫の原作では、元々十万馬力だったアトムが百万馬力に改造されて対抗するんですが、浦沢直樹版ではアトムにもプルートルウ

と同じような処置が施されます。つまり、プルートルウにされたのと同じように、すべての人間の性格をシミュレートし、そこに感情の偏りを与えるわけです。本当はこんなにサラリと言えないほどにいろいろな事があるので語りたいのですが、そういう場ではありませんので控えます。

プルートルウは「憎しみ」を注入されたのですが、アトムの場合は何を注入したのかと言いますと、それは、憎しみからは何も生まれえないという「許し」の感情、つまり慈しみだったのです。アトムは慈しみによって統御されました。

知り尽くすことと慈しむこと

さてここで本日の本題のところからです。つまり、「知り尽くす」ということと「慈しむ」ということについてです。

浄土真宗の本尊は阿弥陀仏です。この阿弥陀仏の名が示しているのは智慧と慈悲の完成です。私たちは「阿弥陀」というのは、無限の智慧と無限の慈悲という意味が込められているんだよと教わりますし、私自身も「仏教の思想」の授業ではそのように教えております。

しかし、私はこの『PLUTO』を読んだ時に、そもそも智慧、つまり知ることと、慈悲、つまり慈しむということとは、本当に直結するのだろうか、と思いました。智慧と慈悲には開きがあるのではないかと考えたわけです。

今、人工知能、AIがいろいろな情報処理の場で活躍し、ものすごい勢いで進歩しています。もちろん、人工知能における知は、仏教で説かれる悟りの智慧とは違うものでしょう。しかし、ブルートゥもアトムも、その人工知能で知り尽くす存在になりました。知り尽くした上で、一方は憎しみによって統御され、一方は慈しみによって統御されたのです。私が『PLUTO』を通して注目したのは、知ることと慈しむということは実は直結するわけではなく、そこには開きがあるのではないかとということです。

「智」と「慧」と「慈悲」

仏教は、智慧と慈悲とを一連のものとして捉えてきたからこそ、宗教として受け継がれ、人々の心に留まってきたのではないのでしょうか。

仏教では智慧のことを般若と言います。この「般若」について中国の曇鸞大師はこのような言葉を残しておられます。

「般若」といふは、如に達する慧の名なり。「方便」といふは、権に通ずる智の称なり。

如に達すればすなはち心行寂滅なり。権に通ずればすなはちつぶさに衆機を省みる。

（『浄土論註』／『註釈版聖典七祖編』一四八頁）

ここでは、智慧という言葉が「智」と「慧」に別けて説明されています。

般若は智慧の「慧」にあたり、物事をありのままに見ていく認識のことです。方便というのは智慧の「智」にあたり、物事をそれぞれに異なった姿として詳しく知ることです。

「慧」によって、全てをありのままに知ることができたならば、自分の思い、とらわれから離れることができます。「智」によってそれぞれの姿を詳しく知り尽くすことができるならば、一人一人に寄り添ったものの見方をすることができます。

静かな見方である般若と、動的な見方、働きかける見方である方便。これらは切り離すことができないということを曇鸞大師は仰っておられるわけです。

智慧と慈悲の統合

私たちの知り方は、知りたいことは知ろうとするけれども、知りたくないことから目を逸らせるという知り方です。もし、私たちが機械のように無感動、無感情、無機質になることができたら、知ることはそれほど苦ではなくなるでしょう。しかし、なかなかそうはいきませんので、私たちは知りたくない現実からは目を背けるわけです。

けれども本来、知るということは、自分にとって都合の良いことだけを知ることではありません。知りたくないことも知っていくということが本当の意味で知るといえることです。だからこそ、知るといふことには深さがあり、また、闇があると云えます。

仏教で説く智慧は、見たくないものから目を背けて見るのではなく、そのものをありのままに見ていくということです。場合によっては目を背けたくなるような現実がありますが、そこから目を逸らさずに見ていくのです。

阿弥陀という仏になる前、法蔵菩薩は、あらゆるいのちを救うため、五劫という長い時間をかけて思惟され、考えに考え抜かれて、さらに兆載永劫という計り知れない長い間修行を続けたと

されます。これは「知り尽くす」ということと「慈しむ」ということはそう簡単には一つに成らないのだということを示しているのではないのでしょうか。そして、知り尽くすことと慈しむことの二つを一すじのものとして完成されたのが阿弥陀仏であるということを表しているのであろうと受け取っております。

本日、讚題に上げさせていただきましたご和讃「十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなはし撰取して捨てざれば 阿弥陀と名づけたてまつる」について、「地上最大のロボット」という作品を通して味わったところを述べさせていただきました。

それでは私の話はここまでとさせていただきます。肝要は拝読の御文章をいただきます。

【文貴宗教部】

(二〇二三年四月二十一日 ご生誕法要)

病院で活動する宗教者たち

打本弘祐

(本学農学部 准教授)



打本 弘祐 (うちもと こうゆう)

1979年生まれ、静岡県出身。

’01年 龍谷大学文学部真宗学科卒業。

’06年 同大学院文学研究科博士後期課程真宗学専攻単位取得満期依願退学。

’14年 桃山学院大学大学院社会学研究科博士後期課程応用社会学専攻修了(社会学博士)。

慶徳会常清の里相談員、看護学校講師などを経て、

’15年に 本学文学部専任講師に着任。

’19年より 准教授。

’20年より 農学部。

’22年より 宗教部長代理。

専攻分野は真宗学、社会学。

【著作・論文】

『悲嘆の中にある人に心を寄せて一人は悲しみにどう向かい合っていくのかー』
(共著、上智大学出版会、2014年)

『慈光法喜』(共著、同朋舎、2017年)

『龍谷叢書58 宗教者は病院で何ができるのかー非信者へのケアの諸相』
(編著、勁草書房、2022年)

『特別養護老人ホームの利用者における宗教的ペイン』『真宗学』第134号、2016年

『医療における宗教的ケアとニーズをめぐって』『龍谷大學論集』489号、2017年

『アメリカにおける臨床牧会教育と真宗僧侶』『真宗研究』第64号、2020年

『ビハーラ活動の現在』『真宗学』141号、2020年

『教団主導型ビハーラにみるビハーラ僧の宗教的ケア 聞き取り調査を通して』
『真宗学』第143・144合併号、2021年

『宗教系病院における死亡した非信者患者及びその家族への宗教者によるケア』
(共著)『天理医療大学紀要』第9巻1号、2021年

ほか多数。

皆さんこんにちは。私は農学部生命科学科の打本と申します。瀬田学舎では宗教部長代理として、こちらの樹心館で勤行などをさせていただいております。

龍谷大学には、文学部に二〇一五年、農学部には二〇二〇年に着任いたしました。現在は「仏教の思想」「歎異抄の思想」「食と農の倫理」など、主に農学部一年生の講義を担当しております。農学部に来てすぐに滋賀県知事の三日月大造知事からお声を掛けていただき、死を考えて生を豊かに生きていこうという取り組みに委員として参加しております。「死生懇話会」「死」を捉えた「生」のあり方を考えるヒントに」という取り組みです。

はじめに

今日、なぜ病院で活動する宗教者についてのお話をしようかと思ったかと申しますと、私自身も、この大学に来るまでに高齢者施設や緩和ケア病棟で働いていたからなんです。緩和ケアというのは、がんなどの病気で患者さんが受けるケアのことです。

実は、今着ているこの緑色のお袈裟、正式には布袍と言う法衣なのですが、この色は、緩和ケ

アで働いている時に同僚のスタッフと一緒に選んだ色です。十五年前のあそかビハーラクリニック開設の時から、こちらの法衣を着て働いておりました。

いろいろな資格と呼称

日本の病院で働いている、もしくは活動している宗教者にはいろいろな資格と呼称があります。仏教系では「ビハーラ僧」と呼ばれます。「臨床仏教師」という資格で働いている方もいます。私自身も入っている「臨床仏教師」という団体もあります。

天理教では「事情部講師」という方々が活動されていますし、キリスト教系の病院ですと「チャプレン」が活動されています。

宗教者でない方でも、「スピリチュアルケア師」という資格があり、また、その資格で活動している宗教者もいます。

今日はこの中でも特に「臨床宗教師」についてお話いたします。

欧米のチャプレン

そもそも、病院で活動する宗教者の原型は欧米のチャプレンです。

チャプレンは元々「施設付きの宗教者」という意味あい、礼拝堂などの宗教施設の管理をし、宗教儀礼を執り行う人々でした。チャプレンの活動の場としては、病院・福祉施設・大学・刑務所・軍隊・企業、アメリカでは議会にもチャプレンがいます。変わったところでは、オリンピック村に派遣されて選手の勝利を祈ったり、負けてメダルの取れなかった選手の悲しみを癒したりもしています。

施設付きの宗教者であったチャプレンは、徐々に宗教勧誘や布教をせず、信者獲得を目的としないで、施設にいる人々の信仰生活を支えるようになっていきました。

そして、信仰の有無に関わらず施設にいる人々の心のケアを担うようになりました。

病や死にゆく苦悩へのケア、身近な人を亡くされて悲嘆にくれる人へのグリーフケア、最近ではスタッフの相談に応じてストレスの軽減などにも取り組んでいます。

今日は農学部の方や学生さんが多いので、農学部と関連するところで言いますと、世界的

な食肉加工業者である「タイソン・フーズ」ではチャブレンを多く雇用しています。この会社のチャブレンは屠畜に関わる職員さんの心のケアなどを担っています。

臨床宗教師の誕生

欧米のチャブレンのこのようなあり方を日本風にしていこうとされたのが、岡部健先生という宮城県で在宅医療をされていたお医者さんです。岡部先生が、欧米の「チャブレン」に対応する日本語として、病院で活動する宗教者を「臨床宗教師」と名付けてくださいました。

在宅で看取りをされていた岡部先生は、「死を目前にした人に、死という暗闇に降りていく道しるべを示せる人間が医療者にはいない。だから、宗教者に入ってきて欲しい」と、そういった思いを持たれていました。その思いが「臨床宗教師」という名前に込められています。

それから、「日本臨床宗教師会」という一般社団法人も作られました。教育・養成は東北大学からスタートし、この龍谷大学や上智大学といった様々な宗教系大学も協力しています。そうやって、いろんな宗教宗派が協力して患者さんや被災者の方を支えていく活動を行っています。

臨床宗教師の透明性を確保するために「臨床宗教師倫理綱領」が定められ、ホームページ上で公開されています。臨床宗教師はこれを遵守しなければなりません。皆さんもホームページでチェックすることができます。もし、それに反して布教勧誘などを行っている臨床宗教師がいたら「あの人は倫理綱領に違反していますよ」と連絡することができます。

チーム医療

日本医師会元会長の高久史磨先生はインタビューの中で「臨床宗教師は宗教活動や布教活動を行うわけではなく、医療・福祉関係者とチームを組んで被災者や遺族の悲しみに寄り添い、生きる力を育むケアを行います」と説明してくださっています。臨床宗教師は、宗教間の協力だけではなく、医療関係者や福祉関係者ともチームを組んで活動しています。

現在、特にがん患者さんを支える場合は、様々な職種で連携をしながら患者さんを支えるチーム医療が行われています。あそかピハール病院を参考に、そのチームにどんな職種があるのかをご紹介しますと、医師・看護師・メディカルソーシャルワーカー・ボランティア・事務・薬

剤師・臨床宗教師・管理栄養士、このように多くの職種の人がチームを構成しています。

昨年の七月にはあそかビハーラ病院で管理栄養士をされている細見陽子先生に龍谷大学に来ていただき、ご生誕法要でお話をさせていただきました。細見先生にはその後も農学部の実習をするという縁ができました。私自身、細見先生はかつて一緒に働いていた同僚ですので、龍大の農学部との繋がりができたことは大変嬉しく思っております。

そうやって、多くの職種の方と一緒に患者さんとご家族を支えていくのがチーム医療なんです。チーム医療において軸にするのは、「患者さんはどうしたいのか」「家族さんはどうしたいのか」ということです。色々な職種の人が、その「思いの宛先」になって、思いを受け止め、それについて会議をしながら医療に取り組んでいきます。患者さんが、その命の最後の最後まで本当に自分らしく生きられるように取り組んでいくのがチーム医療です。

臨床宗教師の基本姿勢

そのチームの中で臨床宗教師はどんな事をしているのでしょうか。

まず、ケアの対象は「すべての患者さんとそのご家族」です。そして、スタッフもサポートしています。スタッフもケアの対象者なんです。

そして、ケアの対象者が信者なのか非信者なのかは一切問いません。例えば、私であれば浄土真宗の僧侶ですが、ケアの対象者が浄土真宗の門徒なのかそうではないのかは一切問わないのです。

相手の方の価値観や人生観、信条や信仰についても尊重します。他宗教の信者の方であっても、その方の信仰を尊重します。こちら側の宗教観を一切押し付けないようにしながら、対象者と関わっていきます。

また、臨床宗教師は宗教者として専門性がある宗教的ケアを行うこともあります。病院によりますが、患者さんが亡くなった後に病院の中でお別れの会を開いて、いろいろな儀礼をし、お別れの時間を設けるところがあります。

ケアの対象になる方が、特にもうすぐ命終わっていかなければならない患者さんの場合、臨床宗教師は、患者さんと一緒に「人生の意味は一体何なのか」ということを考えていく「伴行者」になっていきます。そうした関わり方のことをスピリチュアルケアと言っています。

スピリチュアルケア

スピリチュアルケアは、宗教者への期待が高いケアです。

ホスピスや緩和ケア病棟といった、患者さんが亡くなっていくことが前提のところではスピリチュアルケアが必要な場面があります。

二〇二一年の「緩和ケア医／精神科医へのスピリチュアルペインに関する全国調査」では、「医療者が主な担い手になるべき」よりも「宗教家や臨床宗教師が、もっと関わる方がよい」と期待されている値のほうが高くなっています。

では、どんな関わりをしていくのでしょうか。私が関わった患者さんの話をさせていただきますと思います。ご遺族さんから、このお話をすることについての許可をいただいております。

その患者さんは、一人暮らしをされていた男性の患者さんでした。

妹さんがさまざまな病院を探して渡り歩き、もう他に見てくれる病院がない、ということので、私たちの病院に入院することになりました。この妹さんがキーパーソン（患者側責任者）です。

我々は、妹さんからいろいろな情報をいただいたんですが、患者さん本人はすごい医療者不信で、なかなか医療者とはお話をしてくれませんでした。

それで医療者側も困りまして、お医者さんから「打本さん、あの患者さんのところに行って話を聞いてくれないか」と頼まれましたので、私が病室に訪問することになりました。

今のように法衣を着て、僧侶だとわかる格好をして訪問したわけではないんですが、この患者さんは中途失明をされた方でしたので、この格好で行ったとしても私が僧侶であることはわからなかったと思います。

ですので最初に訪問した時、私から「この病院には僧侶がおりまして、お参りさせてもらったり、患者さんのお話を聞かせてもらったりもしています」と言った時、その患者さんは「お坊さんかあ。じゃあ、引導を渡してくれんか？」と仰いました。

お坊さんと言えば死者の儀礼をする存在だろうということで、引導を渡してくれと言ったので

しょうが、その患者さんは当然まだ生きておられます。生きている間にそういうことを言うんですね。

私たち臨床宗教師の関わり方は、患者さんに言われたことにすぐに応答するというものではありません。「引導を渡して欲しいなら、すぐに渡しませう」なんていうことはできないんですね。まずは、「どうして引導を渡して欲しいと思うんですか？」と聞いていくんです。そうすると、「ここにおったら、妹に迷惑をかけるから死にたいんや」という言葉が出てきました。

私が「どんなことが妹さんにとって迷惑になると思っているんですか？」とお聞きすると、目が見えなくなってしまうこと、それによって妹さんにすごく苦勞をかけてしまっていることなどをお話くださいました。

書類も書けませんので、入院の書類とかも書いてもらわないといけなかった。病院を探すのも全部妹がやってくれた。妹も自分の生活があるのに、自分のためにいろいろさせてしまっている。だから早く死んだ方が良く、とそういう思いを聞かせてくださいました。

そしてその他にも、がんになってしまったこと。がんが見つかった時に、もう手の施しようがないと言われたこと。病院から追い出されるように自宅に帰ったこと。様々なお話をしてくれま

した。

この患者さん、そうやって私に話をしてくれた時に、ものすごく顔が険しくなっていました。「もっと早う見つけとったらこんなことにはならんかったんや」と仰るんです。目が見えなくなつた時も、定期的に眼科には行っていたそうです。がんが見つかった時も、定期検診は受けておられたそうです。それなのに、お医者さんがちゃんと見つけてくれなかったという思いがあるんですね。目が見えなくなったのも、がんになってしまったのも、この病院に来たのも、全部医者の子なんだ、という思いがあるんです。

もちろん、お医者さんも、そういう思いでやったわけじゃないと思います。この患者さんのことをいろいろ考えたでしょうし、仕方がない部分もあったでしょう。しかし、この患者さんの思いとしては、そういう受け取り方をしていたということなんです。

そこから数日間、私はその患者さんの「思いの宛先」になって、この方の怒りを受け続けました。「あるがままを聞く」といいますけれども、その怒りをずっと聞いていくという関わりを始めました。

そしてある時の夕方、突然、患者さんの顔が和らいだんです。そして次に、「お経をあげてく

れんか。夕方になるとお経が聞こえてくるから、あなたに一卷お経をあげてほしい」と仰いました。

ここでもすぐに「では、お経をあげましょう」とは言えません。臨床宗教師の関わり方としては「どうしても、そのお経をあげてほしいと思われるんですか」と聞いていくんです。

そうすると、実は九州で仕事をしていたが、事業がうまくいかなくて、家族を捨てて関西にやってきた。だから、お母さんが亡くなったことも、妹さんから知らされた。知らされた時も、お葬式には行けなかった。お墓参りもずっと行けていない。だから最後に、ここでお母さんのためにお経をあげてほしい。そういう思いをお話してくださいました。

そこまで聞き受けてから「わかりました。では一緒にお経をお勤めしましょう」とお応えして読経する。そういう繋がりを作っていきます。

この患者さんは、いろいろと話すうちにお母さんへの思いが出てきました。今まで、できていなかったことへの罪責感があったんです。しかし、一緒にお経を読む中で、それが段々と変わっていかれました。

この患者さんは、この病院で五ヶ月間を過ごされて、誕生日を皆でお祝いすることもできまし

た。最初は不快感から怒りばかりだったんですけど、最後はお医者さんとも仲良くなり、看護師さんにも非常にいろんな話をしてくださいました。

その患者さんが亡くなってから、妹さんが、その患者さんが書いた手紙を持ってきてくださいました。もちろん、目が見えないので綺麗な字ではありません。揺れながら書かれた手紙でした。こんなことが書いてありました。

ここが人生の終着駅だと思っていただけ、

天国への始発駅になりました。

向こうから、皆様のことを見守っています。

ありがとうございます。

最後にはご自身でお名前を書かれました。

私たちにとって、こういった関りを持つことは本当にありがたいことでした。

もちろん、臨床宗教師をしていると、たくさんしんどい事はあります。しかし、こうした患者

さんからの思いもかけないメッセージをもらうことによって、次へと進める気がしています。

この方は、きっと今日も見守ってくれているのでしょう。

病院で活動する宗教者たちの実態調査から

今までは私の経験を含めながらお話をしてきました。ここから残りの時間は、私が今調査をしていることについてお話をしていこうと思います。

今、天理医療大学（二〇二三年より天理大学に統合）の先生が代表をしているプロジェクトに参加しています。病院における宗教者の実態調査です。

そこでは、キリスト教系の病院や天理よろづ相談所病院、仏教系ですと、最も長く病院の中にお坊さんを置いている長岡西病院、そして新宗教系では立正佼成会の立正佼成会付属佼成病院で調査をしています。

そして私が勤めていたあそかピハークラ病院（設立時はあそかピハークラクリニック）という病院です。この病院は、京都府の城陽市にある病院です。

龍谷大学とも縁深い浄土真宗本願寺派が設立母体となり、ビハラー総合施設が二〇〇八年四月に設立されました。そこに、特別養護老人ホームとあそびハラー病院があります。

ここは、運営が浄土真宗本願寺派から日伸会ビハラー医療福祉機構という法人に替わりましたが、病院の理念自体は引き続き「ぬくもりとおかげさま」という理念で運営されております。

仏のお慈悲の「ぬくもり」の中、生かされて生きる

「おかげさま」のこのころで

やすらぎの医療を実践します。

という理念です。

病院に入っすぐのホールには阿弥陀如来のお軸が掛けられています。

また、その横にはご寄付いただいた小さい鐘撞堂があります。年末にはこの鐘で除夜の鐘を撞くことができます。このように、仏教に縁のある文化をこの病院の中では実践できます。

病院の中にこのように仏さまが掛けられているというのは結構驚かれる方もいるんですけれ

ども、ホスピスや緩和ケア病棟の中に宗教的な設備があるということについては割と肯定的に評価されています。宗教的な背景がある病院の方が患者さんの望ましい死の達成度（GDI / Good Death Inventory）が高いというデータがあります。

GDIが高くなる要因としては、宗教的な設備があることで、死生観や宗教観について話しやすい雰囲気があることや、話す相手がいなくても仏さまや十字架の前でいろいろと思う時間が取れるということがあります。

そういった意味合いもあり、宗教設備がある方が良いとか、あるいは礼拝や説法を含む宗教者との関わりが持てることによって、患者さんに穏やかな時間が提供できるのではないかと思っています。

あそかビハラ病院の臨床宗教師の活動

あそかビハラ病院にいる臨床宗教師たちは何をしているのかというと、まず、朝の勤行で読経してから朝礼、ミーティングでスタッフさんいろいろな相談をし、患者さんの所に伺います。

患者さんのところに伺うだけではなく、病院の庭の手入れをしたりもしています。お寺で草むしりしているお坊さんはイメージしやすいかと思いますが、病棟の窓からお坊さんが草むしりをしているのが見えたりするので、そこからまた患者さんに声をかけたり、逆に患者さんが気にして声をかけてくれたり、そんな繋がりも生まれています。こういったことを環境整備と呼んでいまずけれど、そのように日常の生活を支える中で、出会いが生まれてくるという感じです。そして、カンファレンスといって、患者さんやご家族の様子を医療者と一緒に検討し情報共有をし、十六時から夕方の勤行をするといった流れになっています。

あそかびハーラ病院の臨床宗教師は、患者さんの要望に応じて日常生活のサポートをすることが自分たちの仕事であると捉えています。

例えば不定期的な活動の中にはイベントの企画開催というのがあります。花見・梅を見る会・七夕・誕生日を祝う会、患者さんのご家族の結婚式を病院のホールで執り行ったりもします。

体力が落ちて通常であれば結婚式に参加できない患者さんでも、病院の中であれば何とか参加できたりします。

今日は管理栄養士を目指す方々も聞いておられると思いますが、食のイベントもたくさんあり

ます。たこ焼きパーティー・バーベキュー・流しそうめんなどです。患者さんご自身は食べられない場合もありますが、ご家族と一緒に参加されて楽しい時間を過ごせるようなイベントを行っています。管理栄養士さんが主導されて、宗教者は黒子のようにいろいろな手伝いをしています。それも臨床宗教師の役割として認識しています。

仏堂では夕方に勤行があり、そちらには希望する患者さんも参加されます。車椅子で参加される方もいますし、ベッドに寝たままで参加できます。

この病院は笑い声がたくさん聞こえるところです。夏休みには子どもたちがやってきました。患者さんのお子さんです。ビハラー僧と呼ばれる臨床宗教師は、その子たちと一緒に遊んだりもします。すごく明るい雰囲気のホテルです。

終末期医療の病院なのにびっくりするかもしれませんが、そういった病院なんです。

非信者の患者にとつての「お参り」

この病院がある城陽市は、浄土真宗の方が特別多い地域というわけではありません。ですから、

仏堂にお参りされている患者さんは、全員が浄土真宗の信者の方というわけではないんですね。

では、非信者さんである患者さんにとって、勤行の意味とは何なのでしょうか。また、それを臨床宗教師はどう捉えているのでしょうか。

当然、宗教儀礼の読経や作法は浄土真宗の内容で行っています。しかし、この臨床宗教師は、たとえ浄土真宗の同じ宗派の方であっても、その日に参加するか参加しないかについては毎日確認をしています。非信者さんにも当然確認をしますし、家族さんにも確認をとります。間違っても、布教をして信者獲得をしているように見られないように、ご本人さんたちの意思確認をしっかりとっているんですね。そうやって、押し付けない姿勢を整えています。

非信者の方にも、仏堂という宗教的な場所で、仏様という超越的な存在と向き合って自分の死を考えていただくような時間を提供しているんだと考えています。

宗教的なことからの喪失へのケア

これを私なりに考察してみますと、実はこういった活動は、宗教的な機会や環境の喪失に対す

る患者さんへのケアなんですね。

病院や高齢者施設に入った患者さんや利用者さんは、お参りする機会を失ってしまう方が多いんです。日本の病院にはそういった宗教的な設備がないところの方が多いからです。手を合わせたくても施設や設備がないので合わせられません。施設や設備がないことで、宗教的な機会を失ってしまうのです。

患者さんの中には、家にあったお仏壇を処分して入院してきましたと言う方が多くいます。なかなか病院に自宅の仏壇を入れることはできません。

私が高齢者施設で働いていた時にも、「泣く泣く処分してやってきた」という方がおられました。お仏壇を処分するというのは大きなことです。そして、お仏壇を処分してしまうことは、手を合わせる環境がなくなってしまうという事でもあります。それなのに、こういった事について今までの日本の病院や施設では配慮されてこなかったんです。

入院することで、家でしていた仏壇へのお参り、お世話になっていた宗教者との繋がり、家族の中で宗教者と連絡を取っていた役割などの「宗教的なことがら」を失ってしまいます。

他宗教・他宗派への対応

あそかびハーラ病院の臨床宗教師は、他宗教・他宗派の方に対しても出来る限り対応しています。たとえば、浄土真宗では般若心経を読まないのですが、患者さんからのニーズがあれば耳元まで般若心経の音源を持って行って聞かせてあげたりします。他宗派の方が式章（在家仏教徒が首から掛ける袈裟のようなもの）が欲しいと希望されれば、ちゃんと菩提寺に連絡して、その宗派にあった式章を購入できるようにします。患者さんが上座部仏教の指導者と会いたいと言ったことがありました。この臨床宗教師がタイの上座部仏教のお坊さんと連絡を取り、面会を実現させました。仏教以外でも、教会の牧師さんに来てもらって臨終の儀式をしてほしいと患者さんが言われた場合は牧師さんと連絡を取って儀式を執り行っていたいただきます。そういった手配をするのも、この臨床宗教師の仕事です。

患者さんの信仰や希望をしっかりと確認して、できる限り多様な形で宗教的ケアを実現し、他宗教・他宗派であっても外部の聖職者へ橋渡しをしていくことで患者さんの宗教的ケアを実践しています。

他宗教の聖職者が来た時には、場所と時間を確保します。そういった儀礼に関わる専門的なことは医療スタッフには分かりませんので、病院の中で場所を用意して時間がこれ位かかるということを医療者に伝えます。まさに、黒子になって様々なケアがうまくいくように努めています。

こうしたことは私の博士論文の指導教員だったキリスト教者の伊藤高章先生から教わりました。伊藤先生は「欧米の病院チャプレンによるケアの最優先課題は、患者とその属する信仰共同体との橋渡し」と仰っています。欧米のチャプレンのケアの最優先課題を、城陽市の小さな病院が実現しているんです。

私はこの病院を立ち上げる時から関わりましたけれども、このようなケアが日本の医療の中で実現できていることを本当に誇りに思っています。

おわりに

このような内容をまとめて昨年、研究メンバーと共に『宗教者は病院で何ができるのか——非信者へのケアの諸相——』という本を龍谷叢書から出すことができました。その最後のあとがきを

紹介させていただきます。

本書が、どのような形であれ、病の中で苦しみや悲しみ、幾重にもなったいろいろな思いを抱く患者さんにご家族のために、また亡くなって逝かれた患者さんにご遺族のために、少しでも役立つことを願っている。

(森田敬史・打本弘祐・山本佳世子『龍谷叢書58 宗教者は病院で何ができるのか―非信者へのケアの諸相』

勁草書房、二五二頁)

このような文章を最後に書かせてもらいました。そうしましたら、今年の一月に読売新聞で堀川恵子さんという作家さんが書評を寄せてくださいました。

私自身も経験したことが、どんな固い絆で結ばれた関係でも最後は第三者の助けが必要になる。治療手段を失った病院関係者は「死」には無力だ。亡き夫からさまざまな思いを引き出してくれたのは、親友でもある尼僧だった。臨終間際の豊かな時間は、遺族にとってもそ

の後を生きる支えになる。

(読売新聞／二〇二三年一月二九日)

堀川さんが言う尼僧さんは浄土真宗とは違う宗派の尼僧さんのことだと思えます。他宗教・他宗派の方たちも、病院の中で一生懸命に患者さんやご家族さん、ご遺族さん、またスタッフの人たちを支えようとしています。

病院で働いている宗教者に対してはまだまだ誤解や偏見が多いんじゃないかと思えます。今日のお話で、少しでもその偏見や誤解を解くことができれば嬉しいです。

今日はお昼の貴重な時間にご清聴いただきまして、誠にありがとうございました。これで私のお話は閉じさせていただきます。

【文責宗教部】

当日使用したスライドは龍谷大学宗教部チャンネルのアーカイブからご確認いただけます。



YouTube

(二〇三二年十二月十六日 ご命日法要)

「マトリックス」の世界

— 唯識無境について —

早島 慧

(文学部 准教授)



早島 慧 (はやしま さとし)

1983年生まれ 長崎県出身。

'08年 龍谷大学文学部仏教学科卒業、

'14年 同大学院文学研究科博士課程修了。

本学講師を経て、准教授に就任。

専攻分野は仏教学。

【著作】

『大乘莊嚴經論』第XVII章の和訳と注解 - 供養・師事・無量とくに悲無量 -
(共著／自照社出版 '13年)

『戒律辞典を知るための小辞典』(共著／永田文昌堂 '14年)

『大乘莊嚴經論』第II章の和訳と注解 - 大乘への帰依 -
(共著／法蔵館 '20年)

『大乘莊嚴經論』第IV章の和訳と注解 - 菩薩の発心 -
(共著／法蔵館 '23年)

『瑜伽行派における六種散乱の変遷 - 初期瑜伽行派文献の成立順序に関する試論 -』
(『佛教学研究』77・78)

『大乘莊嚴經論』安慧釈の撰述問題 - “*rgya gar skad du*” という表現に注目して -』
(『印度學佛教学研究』70-1)

“The Influence on *Prajñāpāramitopadeśa* by the Literatures of the Early Yogācāra : Focusing on the Theory of Three Natures (*Trisvabhāva*) ”

(『インド学チベット学研究』22)

ほか。

こんにちは、文学部の早島と申します。本日は、『マトリックス』という映画を紹介し、この映画の内容と絡めながら、唯識という仏教の考え方についてお話ししたいと思います。

映画『マトリックス』について

『マトリックス』という映画は一九九九年公開の作品です。主演はキアヌ・リーブスで、アクションや美しい映像で大変話題になりました。また、今年続編が公開されましたので、続編を知ってから最初の映画を見た、という方もいらっしゃるかもしれません。

このように有名な映画なのですが、必ずしも皆さん全員がこの映画を知っているとは限りませんので、今から広告動画を見ていただこうと思います。

(広告動画再生)

さて、どうでしょうか。拳銃で撃たれそうになった主人公が、仰け反って弾丸を避けるシーン

は非常に有名です。「このシーンなら見たことがある」と思われた方も多いかと思います。

この映画は、アクションや映像の良さだけではなく、内容についても当時としては非常にシヨックキングでした。簡単に紹介していききたいと思います。

この映画の主人公であるトーマス・アンダーソン（キアヌ・リーブス）は、日常生活を送りながら、「私が現実だと思っているこの世界は、もしかしたら夢ではないのか」という違和感を持っています。その主人公がある日、「起きろ」というメッセージを受け取り、この世界が現実ではなく、コンピューターが創り上げた仮想現実の世界Ⅱマトリックスであるということ知らされるのです。そして、本当の世界で目覚めたトーマスは、人類をマトリックスから解放するためにコンピューターとの戦いに身を投じていく、という内容です。これ以上お話ししますとネタバレになってしまいますので、このあたりで止めておきましょう。

この「起きろ」というメッセージを受けるところが、劇中において非常に重要なシーンであり、今日の話にとっても重要な部分です。覚えておいていただければと思います。

胡蝶の夢

私たちは現実の世界を生きています。映画に出てくる仮想現実の世界はフィクションであり、私が生きているのは仮想現実ではない現実世界です。私たちはそう思っています。しかし、本当に「そうだ」と言いきれるのでしょうか。

たとえば、寝ている時、あるいは起きている時でもかまいませんが、「今、私は夢を見ているのではないか」と思ったことはありませんか。

中国の説話に「胡蝶の夢」という話があります。思想家の荘子が、夢の中で蝶々になってヒラヒラ飛んでいたのだけれども、目が覚めてみて考えるわけです。

「私は蝶になった夢をみていたのだろうか、それとも夢で飛んでいた蝶こそが本当の自分であって、今は人間になっていて夢を見ているのではないか。」

皆さんの中にも、そんなことを少しは思ったことがある方が居られるのではないのでしょうか。

実は、今から千五百年ほど前のインドに、本気で「私たちが現実だと思って生きているこの世界は夢のようなものである」と主張した仏教徒たちがいました。

本日は、現実世界は夢のようなもの、つまりマトリックスのようなものであると主張したイン
ドの仏教徒についてご紹介させていただきます。彼らは、唯識派と呼ばれるグループです。

唯識無境

唯識派の人々は「この世界は夢、あるいは幻のようなものである」と主張しますが、唯識派と
映画『マトリックス』とは大きな違いがあります。

『マトリックス』ではコンピュータが仮想現実の世界を作り上げているわけですが、唯識派
は、私たち一人一人の心こそが、この夢幻の世界を作り上げていると主張するのです。

副題で挙げました唯識無境という言葉は「唯識」と「無境」という二つの言葉から成り立って
います。

唯識とは、「ただ（唯）、心の顯れ（識）のみが存在する」ということ、つまり「この世界は私
たちの心の顯れに過ぎない」ということです。私たちの心自身がこの現実を作り上げている。心
の顯れのみが存在するということです。

では、「ただ、心の顕れのみが存在する」のだとするならば、私たちが現実だと思っているものは何なのでしょうか。例えば、ここにあるパソコンのマウスとか、皆さんが座っている椅子、机などですね。唯識派の人に「こういうものは何なのか」と問うと彼らはこう答えます。

「マウスだとか椅子だとか机は実在しない。あくまでも、在るのは私たちの心の顕れのみだ。」
これが彼らの主張なのです。「外界の存在対象(境)は実在しない(無)」のです。まさに映画『マトリックス』の世界です。唯識派はマトリックスを本気で説いていた人たちなのです。

唯識派Ⅱ 瑜伽行派

実は、唯識派は「瑜伽行派、ヨーガーチャラ」とも呼ばれていました。ヨーガについては皆さんも「ヨガ」という言葉として聞いたことあると思います。元々はインドの言葉で、修行全般を指す言葉です。彼らは心を集中する瞑想修行をしていましたので、「瑜伽行派、ヨーガーチャラ」と呼ばれていたのです。

彼らは千五百年前からいたとお話ししましたが、実際には四世紀から五世紀にかけて、弥勒・

無著・世親という三人の人物によって、その思想が大成されました。

世親については、真宗学の方にとっては七高僧の天親という名前の方がより馴染み深いでしょう。

唯識派と『西遊記』

皆さん「西遊記」という物語をご存知かと思えます。登場人物の三蔵法師には実在のモデルがいます。それが玄奘三蔵という人物です。この玄奘がインドに渡って学問を学び、また中国に戻る、その旅の旅行記が『大唐西域記』であり、これを元に書かれた物語が『西遊記』です。

この玄奘三蔵がインドで学んでいたものが唯識なのです。

そして、玄奘の弟子であった基によって法相宗が大成され、それが日本に伝わり、清水寺や法隆寺の教えに繋がっていきます。マトリックスのような世界観を説く教えが日本にも伝わっていたのです。

唯識派の主張

この唯識派、先程も言いましたように「この世界は心の顕れに過ぎない」と説きます。では彼らは「心」というものをどう理解していたのでしょうか。

「識」という考え方があります。識は心の働きであるとか、あり方のことです。

「心の分析」

識（心のはたらき、あり方）

- ①眼識
- ②耳識
- ③鼻識
- ④舌識
- ⑤身識
- ⑥意識
- ⑦マナ識
- ⑧アーラヤ識

①から⑥については、目・耳・鼻というような感覚器官についての心の働きです。それぞれに視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚ときて、最後の「意識」というのは思考判断する心ということです。

この「識（心のはたらき、あり方）」というのは「識別する心のはたらき」のことです。視覚の対象を識別する心のはたらきであり、味覚でしたら味を識別する、そうやって、対象を識別して

把握する心のはたらき、あり方のことです。インドの仏教は一般的にこの六つで考えます。これらは、日常的に感じている五感に関するものと、それについて考えるということですから、我々にとってはイメージしやすいですね。

しかし、唯識派の特徴的なところは⑦と⑧にあります。

⑦のマナ識は「自己に執着する心」。「私が、私が」と無意識のうちに思ってしまう心のことです。⑧のアーヤ識は過去の経験を蓄積する根底の心です。

①から⑥は五感に関する現象的な識で意識レベルのことですが、それに対して⑦と⑧は無意識レベルの潜在的な識です。普段私たちが意識していない心のはたらきです。

「心の分析」

識（心のはたらき、あり方）

「現象的な識」

- ①眼識 Ⅱ 視覚
- ②耳識 Ⅱ 聴覚
- ③鼻識 Ⅱ 嗅覚

④舌識Ⅱ味覚 ⑤身識Ⅱ触覚 ⑥意識Ⅱ思考判断する心

〔潜在的な識〕

⑦マナ識Ⅱ自己に執着する心 ⑧アーラヤ識Ⅱ過去の経験を蓄積する根底の心

現在では、ユングやフロイトといった心理学者によって、無意識という考え方が一般的になりましたが、唯識派の人たちは四、五世紀の時代から無意識すなわち潜在的な識の働きを非常に重視していました。

アーラヤ識

アーラヤ識という言葉は初めて聞いたという方も多いでしょう。でも、この「アーラヤ」という言葉を皆さん聞いたことがあるだろうと思います。ヒマラヤという山はご存知ですよ。このヒマラヤ（ヒマ+アーラヤ）の「ヒマ」は「雪」という意味で、「アーラヤ」が「蔵」、「貯蔵庫」

という意味です。

つまりヒマラヤは、ヒマ（雪）のアーラヤ（貯蔵庫）、「雪の蔵」という意味です。

では、アーラヤ識には何を貯蔵しているのかというと、「過去の経験」を貯蔵しているのです。例えば、電車の中で隣の人が聞いている音楽が漏れ聞こえてきたとします。「あっ、この曲は誰々の何々という曲だ」っていうことを思う。このような現象がなぜ起こるのかというと、過去にその曲を聴いた経験があるからです。

唯識派の人たちは、このようなことが起こるのは、「過去に意識レベルで認識した経験が無意識レベルに蓄積（薰習潜在化）されているからだ」と考えました。過去にその音楽を聞いた経験が、アーラヤ識に蓄積されているのです。だから、その音楽をもう一回聞いた時に、無意識レベルの蓄積が意識レベルに出てきて（顕現・現行）、「この曲はアレだな」と思うわけです。

私たちは、ずっとこれを繰り返しているのです。つまり、何かを意識レベルで経験し、それが無意識レベルに貯蔵され、それが意識レベルでの経験によって潜在的な識から出てくる。これを繰り返しているのです。

いつから繰り返しているのでしょうか。私たちは「生まれた時から」と考えがちですが、唯識

派の人々はそうではなく「輪廻が始まった時から」と考えます。前世の経験も、前前世の経験も蓄積されているのです。輪廻が始まった時からの、無限の過去からの経験が、ずっと蓄積されていて、それが意識レベルに顕現するのです。

唯識思想の始まり

先程、少し心理学の話をしました。フロイトやユングは、精神疾患の患者さんを診る中で、無意識ということを考えるようになりました。

それに対して、唯識派の人たちは瞑想修行を通じて潜在的な識について考えるようになりました。

瞑想して自分の心を鎮めるとか、あるいは鎮まらない心があるとか、また、瞑想の高い境地で意識がなくなった場合には生命機能をどうして維持しているのだろうか、無意識状態から戻ってくる時には何が繋ぎとめているのだろうか、このような瞑想体験に基づいて、唯識派の人たちは潜在的な識について考えるようになりました。

ここで、一枚の写真を見ていただこうと思います。

この写真は、中東のイエメンという国にあるシバームという世界遺産で撮られた写真です。

全く何もない砂漠のど真ん中にビル群が写っています。このビルは数百年近く前に土で作られたビルです。

さて、この写真を見て、皆さんはどういった感想を持たれましたでしょうか。「すごいな」という感想でしょうか。人によっては「真ん中に写っている小汚い男は誰だ」と思われたかもしれません。また、昔から私のことを知っている方からすると「あ、この真ん中の小汚い男は早島じゃないか!」と思われたでしょう。そうです、この小汚い男は大学生時代の私です。

つまり、この写真一枚とっても、見る人によって見え



方が全然違うということです。

私は、この写真を見ると「懐かしい」という感想を持ちます。「ああ、あの時行ったな」といろいろなことが思い出されてきます。でも、皆さんはこの景色を見ても「懐かしい」とは思わないでしょう。なぜなら、皆さんはおそらくシバームに行ったことがないからです。経験したことがないと「懐かしい」という感想は湧いてきません。この違いを作っているのがアーヤ識です。つまり過去にどういう経験をしたのかという違いが、この一枚の写真を見るにあたっての感想の違いを生み出しています。

感動的な景色があり、初めて見た人が涙をながすようなものであったとしても、毎日その景色を見ている人は涙を流すことはないでしょう。過去の経験がどういものだったのか、その経験によって同じものを見ても同じには見えていないのです。

だからこそ、唯識派の人たちは、

「私たちが同じ世界だと思って共有している現実世界であっても、それは人それぞれの心の顕れに過ぎない。あくまでも、見ている景色というものがそのままに存在しているのではな

く、そう見えている私たちの心の顛れに過ぎないのだ。」

と主張するわけです。

ですから、先程、このマウスや椅子や机なんてものは実在しないという言い方をしたわけです。あくまでも心の顛れに過ぎないのだということですよ。

当然、いきなりこんな主張されても全てを受け入れるというのは難しいことかと思えます。千五百年前の当時でも、結構反論がありました。

例えば、現実世界で火を触ったら熱くて火傷をしますが、夢の中なら火傷する事はありません。これをどう説明するのかというような問いがありました。夢と現実の違いに関する問いですね。

それに対して唯識派の人たちは、夢の中で怖い夢を見たら、現実世界で起きた時に凄く寝汗をかいている時がある。夢の中で起こったことが必ずしも何の効果もないということは成立しない。というようなことを言いながら、積極的に、「この世界は夢や幻のようである」と主張していきま

唯識派の目的・目標

では、彼らは何のためにこんなことを考えていたのでしょうか。そもそも、なぜこんなことを考えないといけなかったのか。

フロイトやユングの心理学は精神疾患の治療やケアという目的を持っていました。一方で、唯識派の人たちの究極的な目的・目標とは何だったのでしょうか。

唯識派は、大前提として仏教徒なのです。仏教徒の究極的な目標は悟りを開くこと、つまり成仏です。ですから、彼らの主張する「ただ（唯）、心の顕れ（識）のみが存在する」というのも、悟りを目標とした理論なのです。

ゴータマ・シツダルタが説くように、私たちは迷いの世界のあり方をしており、仏は悟りの世界のあり方をしています。今、迷いのあり方にある我々が、いかにして悟りを開くことができるのか。唯識派の人たちは、仏の世界・悟りを開いた世界に到ることを目標としていたのです。

世界を変える唯識

彼らは、迷いの世界や悟りの世界というレベルの世界観で、世界を三つのあり方で考えます。

「世界のあり方」

三性説

円成実性 Ⅱ 完成した悟りのあり方

遍計所執性 Ⅱ 煩惱に包まれた迷いのあり方

依他起性 Ⅱ 縁起したあり方・ありのままのあり方

さて、ここに中身の見えない封筒が二枚あったとします。一枚には一万円札が入っています。そして、もう一方にはただの紙が入っています。この二枚の封筒から一枚を引いて、その封筒を貰えるとしたら、皆さんはどちらの封筒を引きたいと思いますか。きっと、「そりゃあ、一万円の封筒を引きたい！」と思うでしょう。

ですが、良く考えてみてください。実は、ありのままのあり方からしてみれば、「両方ともただの紙が入っているのです。

二・三歳の子に一万円札とただの紙切れを渡せば、その子は両方ともビリビリに破くでしょうね。でも、私たち大人は絶対にそんなことをしたくないのです。少なくとも私は絶対にしません。なぜなら、迷いのあり方にある私は、同じ紙であるはずなのに、どうしても価値を見いだしてしまふからです。しかし、悟りを開いたとまではいかなくとも執着を離れた人からすると、一万円札にも執着しません。

先程、この世界の三種のあり方があるとしました。しかし、三つのあり方といっても、三つの世界が存在するわけではありません。存在するのは一つの世界です。しかし、その一つの世界について、執着して見ればただの紙切れが一万円札に見えたりするし、執着を離ればそうは見えないということなのです。

つまり、私たちの見方によって、この世界のあり方が変わるといふことです。なぜそれが可能なのかと言えば、唯識だからです。唯識であるから、「この世界は私たちの心のあり方次第で変わる」という理屈が成り立つわけです。

今、私たちは煩惱につつまれた遍計所執性のあり方で世界を見ているのだけど、自分の心が悟りの境地に至ったなら、この同じ世界が完成した悟りのあり方になるのです。

唯識派にとっては、心の顯れこそがこの世界なのだから、自分の心を変えれば世界を変えることができるのです。迷いのあり方から 悟りのあり方で世界を転換することができるのです。

成仏・迷いのあり方から悟りのあり方へと変わるといふことの根底にあるのが、この唯識の世界、マトリックスの世界ということです。

『マトリックス』と『リトルブツダ』

最後に、改めて映画『マトリックス』について、だいたふ無理矢理ですが、私なりの考察を聞いていただきたいと思います。

『マトリックス』の主人公は「この世界はもしかしたら夢ではないのか」という違和感を持ち、ある日「起きろ」というメッセージを受け取って、自分が元々いた仮想現実の世界を本来の世界のあり方へと転換していきます。

「起きろ」というのは、英語では「ウェイクアップ (wake up)」で、サンスクリット語では「ブドウフ (budh)」という動詞です。この「ブドウフ」から派生した言葉が「目覚めた者、悟った者」を意味する「ブツダ (仏陀)」です。

『マトリックス』は、夢の世界に生きていた主人公が「起きる」、つまり悟りを開いて、仮想現実の世界（遍計所執性）を実際の世界のあり方（円成実性）に転換していく。そして、いまだに迷いのあり方にある人々を救済するために戦う物語である、と見えなくはない。

そして、もう一つの映画を紹介したいと思います。『リトルブツダ』です。実は、この映画でキアヌ・リーブスは一度悟りを開いているのです。『リトルブツダ』では、今の世界と過去のゴータマ・シツダルタの生涯が語られながら展開していきます。この映画で、悟りを開くゴータマを演じているのがキアヌ・リーブスなのです。

『リトルブツダ』で悟りを開いたキアヌ・リーブスが、次は迷いの世界である『マトリックス』の仮想現実の中で「起きろ（ウェイクアップ）」という言葉のままに悟りを開き、未だに迷いのあり方の中にある衆生を救っていくのが『マトリックス』である、と考えられなくもない。

もちろん、これは私の考察であり、『マトリックス』の監督がこう考えたのだとは言えませんが、

仏教的に考察するならこう考えられなくもないのではないかと思っております。

それでは、これで本日のお話を終えさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

【文責宗教部】

（二〇二三年五月二十一日 降誕会法要 深草学舎）

法然と親鸞…二人の功績を考える

平岡聡

（京都文教学園学園長・京都文教大学教授・前学長）



平岡 聡 (ひらおか さとし)

1960年生まれ 兵庫県出身。

'83年 佛教学部文学部仏教学科卒業。

'88年 同大学院文学研究科博士課程単位取得満期依願退学。

京都文教大学講師，助教授を経て，教授に就任。

'14年 学長に就任（～'21年）。

現在は京都文教学園学園長。専攻分野は仏教学。

【著作】

『親鸞と道元』（新潮社／'22年）

『南無阿弥陀仏と南無妙法蓮華経』（新潮社／'19年）

『ブツダと法然』（新潮社／'16年）

『鎌倉仏教』（KADOKAWA／'21年）

『浄土思想入門』（KADOKAWA／'18年）

『理想的な利他』（春秋社／'23年）

『菩薩とはなにか』（春秋社／'20年）

『なぜ仏教は多様化するのか』（大法輪閣／'23年）

『進化する南無阿弥陀仏』（大法輪閣／'20年）

『法然と大乘仏教』（法藏館／'19年）

など。

平岡と申します。浄土宗の僧侶である私が親鸞聖人の生誕八五〇年・立教開宗八〇〇年の法要で話をしようかと、少し緊張しております。

今日に向けて気合を入れる意味で、昨日は京都国立博物館に「親鸞聖人生誕八五〇年特別展」を見に行ってみました。そこに、真宗浄土教義の相承を表すものとして福井県本願寺派浄因寺所蔵の「震旦和朝高僧先徳連坐像」というものが展示されました。善導大師、法然上人、そして親鸞聖人の三人のお姿が描かれています。

日本仏教は宗派仏教で、教祖絶対主義があり、法然なら法然、親鸞なら親鸞という「点」で見えていく見方をします。しかし、私はむしろ「線」で、つまり一連の流れの中で思想を捉えていく視点が重要だと思っています。

今日は、善導大師から法然上人、そして親鸞聖人へと流れていく浄土教の流れを確認していくと思います。

仏教の多様化

仏教は多様化が非常に激しい宗教です。釈尊当時のあり方を色濃く反映している南方系仏教と日本の仏教を比較すると、本当にこれが同じ仏教なのだろうかと思うくらい違ってきます。大きく変化しているのです。

その変化を是と見るか非と見るか、いろいろな見方がありますが、私は是と見る立場です。つまり、変化について「それでいい」という立場です。

理由は、仏教が対機説法の宗教だからです。対機説法は相手に合わせて法を説くということですから、時代が変われば人々も変化します。変化していく人々に対して、ずっと同じ説き方では駄目なのです。その時代と人々に応じて解き方を変えていかなければならない。そうすると、自ずと仏教は多様化していくことになります。

仏教の多様化は、仏教本来が持っている対機説法という特徴に起因します。

そして、さらにそこに仏教者の解釈が入ってきます。そうすると仏教は更に変容していきます。脱皮をしていくのです。そのような変化を繰り返してきたのが仏教の歴史です。「仏教の歴史は

聖典解釈の歴史である」と言ってもよいと思います。

善導大師の念仏と称名

「念仏」と聞くと、南無阿弥陀仏と声に出すことを思い浮かべるでしょうが、「念仏」は本来「仏を念じること」です。つまり、仏さまの姿や徳を念じることが本来の意味での念仏です。おそらく、最初は仏像を見て、次に目を瞑って、仏さまの姿をありありと思いつかべられるように念じていたのでしょう。

では、声に出してとなえる「称名」の起源はどこにあるのか。インド仏教の初期段階では既に「三帰依」がありました。仏教徒になるために、仏・法・僧の三宝に帰依しなければならぬのです。この時に「南無帰依仏 南無帰依法 南無帰依僧」と口にとなえます。この中の「南無帰依仏」は「仏さまに帰依いたします」と声に出して称えているわけですから、これが称名の起源であると言えるでしょう。

本来は「念仏」と「称名」は別物ですが、この二つが中国の唐の時代に善導大師によって一つ

になりました。

善導大師以前にも、念仏と称名が近い関係として説かれていたということはあります。いきなり心に仏さまを念じるのは難しいことですから、先ずは仏さまの名前を口に称えて精神を集中し、それによって仏さまを念じていくというものです。つまり、称名は「念仏の為の導入過程」として位置付けられていました。念仏は価値が高い行で、称名は価値が低い行であるという価値観がありました。

この関係を一気に見直したのが善導大師です。善導大師によって「念仏と称名」から「念仏が称名」へと解釈が変えられたのです。『大無量寿経』に

「設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺（たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん）」

（『註釈版聖典』十八頁）

とあり、ここに「乃至十念」があります。これは「十念したら（極樂に迎え取る）」ということですが

が、善導大師は

「わが名字を称すること、下十声に至るまで」

〔観念法門〕／『註釈版聖典七祖編』六三〇頁

として、十念を「十声」と読み替えてしまいました。元々「念」という字には「となえる」という意味もあるようですが、この善導大師の解釈によって「念仏は仏さまの名前を声に出して称えることなのだ」と念仏の解釈が大きく変化したのです。

このように、「念仏」を「称名」と同一視したことによって、二種類の念仏が誕生することになりました。これらを区別するために、口で称える念仏を「称名念仏」と呼び、従来通り仏さまの姿を観察する念仏を「観想念仏」と呼びます。

この十念の読み替えについて、津田左右吉という歴史学者は「非常に恣意的」と評価し、「こんなことをするから仏教は変節してしまうのだ」と否定的に捉えました。しかし、私はそうではなく、仏教は変容し多様化するところにその特徴があると思っています。

仏教において何かを証明するにあたっては、「教証」と「理証」があります。教証は、經典に書いてある教えを根拠に証明するということ。もう一つの「理証」は、理屈によって証明していくということです。この二つの方法は仏典に出てまいります。私は、この二つに加えて「体証」もあったのではないかと思っています。つまり、体験によって証明していくということです。これは直接仏典には書いていません。善導大師は体験によって「こうとしか読みようがない」とお考えになったのではないかと私は思っています。

それでも、この読み替えが恣意的かどうかを判断することは非常に難しいのです。それを見極める方法として、その解釈が後世にまで力を持つか、苦しみを滅する教えとして機能するか、人々の心を安心させるか、ということを判断基準にしたいと考えています。そう考えるならば、この読み替えによって法然浄土教あるいは親鸞浄土教が今なお存続し、多くの人々の心の支えになっているのですから、この読み替えは妥当性があつたのだと私は考えております。

このように、新しく称名念仏という道を開かれたことは、善導大師の大きな功績の一つであると言えるでしょう。

本願念仏

善導大師のもう一つの大きな功績は「本願念仏」という新しい考え方を打ち出されたということです。

本願念仏というのは、本願によって約束された念仏ということです。「大無量寿経」第十八願には、念仏する者を極楽に往生させると誓われているのだから、念仏すれば必ず往生できるのだと主張されたのです。これによって、善導大師は価値の低い行であった念仏を、称えれば往生できる行として一気に価値の高いものへと引き上げました。

また、善導大師の教えでは、往生のためには「三心」を具えることが重要です。三心とは、「至誠心（誠の心）」、「深心（深く信じる心）」、「回向発願心（自分の積んだ功徳を回向して極楽に往生したいと発願する心）」です。

これら三つの心を念仏に加えて実践することで、私達はどんなに罪深くとも極楽に往生できるのです。善導大師はそういう道を開かれました。

法然上人の専修念仏

法然上人は十二世紀から十三世紀の人です。善導大師とは地域も時代も全く異なっています。にもかかわらず、法然上人は夢の中で善導大師にお会いになられて改心されたのです。会ったこともない善導大師を本当に心から崇拜されて

「偏に善導一師に依る」

〔選択集〕／『註釈版聖典七祖編』一二八六頁

つまり「私の浄土教は、偏に善導大師の教えによる」と仰って、その教えに従っていかれました。では、善導大師と法然上人の教えはまったく同じなのかというところではありません。伝統は伝統で受け継ぎつつ、法然上人ならではの解釈が加えられています。

善導大師の教えは称名念仏と三心による往生でしたが、法然上人は『十二問答』の中で

「つねに念佛をだにも申せば、そらに三心は具足する也」

つまり「念仏さえ申したら自然と三心は具足する」と仰っておられます。また、「つねに仰せられける御詞」には、

「ふかく、本願をたのみて、一向に名号を唱ふべし。名号を唱ふれば、三心、おのづから具足する也」

（『昭法全』）

とあります。法然上人は、善導大師の「念仏と三心が必要」という教えを、「念仏する中に三心が具わる」と変えていかれたのです。

また、鎌倉仏教全体の特徴として「専修」が挙げられます。ただ一行のみを専らに修するということ。つまり「念仏と三心」という二つでは専修になりません。法然上人にとっては念仏することが全てですから、念仏に三心を吸収していかれたのです。

往相の開拓

法然上人の功績は「念仏往生による往相の道を開拓された」ということだと思えます。

当時の常識では、悟りを開くには厳しい修行をしなければならぬと考えられていました。しかし、法然上人は善導大師の教えに基づきながらも、「念仏は本願によって誓われており、念仏には三心も具わっているのだから、念仏するだけで往生することができる」という新しい浄土教を打ち立てられたのです。これは、娑婆世界から極楽浄土に行く道を開拓されたということでした。それまで誰も道を付けていなかったところに、「念仏で往生する」という路を開拓されたのです。

日本には神仏習合という考え方があり、仏教は神道との混交によって理解されてきました。本地垂迹説によると、仏が垂迹して、具体的に姿を現したものが神です。この神を通して仏に近づいていくというのが当時の常識でした。法然上人はここにもメスを入れ、そういう神的なものを一切否定されました。また、私と阿弥陀仏との間には善知識と言われる宗教家も必要ではなく、凡夫の私が念仏によって阿弥陀仏に直結し、極楽に往生することで救いとられていくのだと仰ったのです。

選択本願念仏

善導大師の念仏は「本願念仏」でしたが、法然上人が主張されたのは「選択本願念仏」です。

本願念仏は念仏で往生できるというものですが、善導大師は他の方法での往生を否定していません。一方で、選択本願念仏では「阿弥陀仏は極楽に生まれる行として念仏を唯一選択した」ということです。極楽に往生できる行は念仏だけで、他の行では往生できないのです。ここで、「念仏でも往生できる」が「念仏でしか往生できない」になりました。念仏は往生のための唯一の行なのですから、当然、念仏の価値が上がります。法然上人は、善導大師の教えを一步進めて選択本願念仏という新機軸を打ち出されたのです。

そのためには何が必要だったかというと、念仏のアイデンティティを変更させるということですね。変なたとえですけれども、たとえばスーパーで普通に売っている大根ですが、ある日どこかの学者が「大根には癌を抑圧する成分が入っている」とテレビで言ったとするとどうなるでしょうか。次の日、大根は売り切れているでしょう。学者の発言によって大根のアイデンティティが変わったということです。今まで誰も気付いていなかったことについて、誰かが「こういう成分

が含まれているよ」「こういう効果があるんだよ」と言えば、途端に皆の大根を見る目が変わります。同じように、念仏も価値の低い行、あるいは念仏したら往生できるという程度の行だったのですが、法然上人が「念仏でしか往生できない」と言ったことで念仏のアイデンティティが変わったのです。

八種選択

選択本願念仏の「選択」は「阿弥陀仏が念仏を往生可能な一行として選択された」という意味です。「それは阿弥陀仏だけの選択なのだから、浄土教を信じる人には普遍性を持ったとしても、その他の仏教一般の人にとっては何も普遍性を持たないではないか」と言う方がおられます。そういうことを言う人は法然上人当時にもおられたと推察されます。そこで、法然上人は『選択集』に八種選択という新たな考え方を打ち出されました。

八種選択

① 選択本願…阿弥陀仏が本願念仏を選択した。

② 選択讃嘆…釈尊は往生の行を列挙するが、念仏のみを選択して讃嘆した。

③ 選択留教…釈尊は余行に言及するが、念仏のみを選択して讃嘆した。

④ 選択摂取…弥陀の光明は念仏の衆生のみを照らし、摂取して見捨てることがない。

⑤ 選択化讃…下品下生の衆生には聞経と称名の二つの行が説かれるが、弥陀の化仏は念仏

のみを選択して、衆生を励ます。

⑥ 選択付属…釈尊は定善（精神を集中して行う善）散善（散乱した心で行う善）を説いてはいるが、

念仏の一行のみを後世に付属した。

⑦ 選択証誠…六方の諸仏は、諸行ではなく念仏による往生こそ真実（誠）であると証した。

⑧ 選択我名…弥陀が自らの名前のみを選択したこと。

八種のうち、①④⑤は阿弥陀仏が選択したことですが、②③⑥は釈尊が選択されたことです。そして、⑦は諸仏が選択されたということです。

法然上人は、阿弥陀仏だけではなく、釈尊も諸仏も念仏を選択された、つまり一切の仏が念仏を選択されたと考えられたのです。これによって、さらに法然上人は念仏のアイデンティティを変えてしまいました。

凡夫の往生

法然上人は「我々はみんな凡夫である」と仰いました。多少は善い行いをしたとか悪い行いをしたということがあつたとしても、人間は全員凡夫だということです。人間を凡夫として一元化したのです。そして、一元化された凡夫が往生できるのは称名念仏しかないと、往生の行も一元化されたのです。

こうして見てみると、「偏に善導一師に依る」と言いながらも、法然上人の浄土教というのは、善導大師の浄土教からは随分様変わりをしています。

当然ですが、法然上人ご自身は善導大師を超えたとかそんなことは思っていないしやらなかったでしょう。

むしろ、真摯に善導大師の浄土教と向かい合われて研鑽された結果として、こういったお考えになられたのだと思います。

信を重視した親鸞聖人

親鸞聖人は、

「たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ」

〔歎異抄〕／『註釈版聖典』八三二頁

と仰いました。つまり、法然上人に騙されて念仏したことで地獄に堕ちたとしても私は後悔しないということです。それほど法然上人を慕っていました。法然上人の「偏依善導一師」と同じような心情でしょう。

親鸞聖人は九歳で出家され、比叡山で二十年間に及ぶ厳しい求道の末に、「よきひと」である法然上人と出会い、浄土の真宗と出合われたのです。法然上人と出会わなければ、親鸞聖人の教えが開花することはなかったでしょう。

しかし、やはり法然上人の教えそのままを親鸞聖人が受け取ったのではなく、そこには親鸞聖人なりの解釈というのが見られます。

法然上人の場合は「とにかく念仏を称えなさい」ということが中心です。つまり、行重視なのです。一方、親鸞聖人は行よりも信心を重視されました。

「如来よりたまはりたる信心」

〔歎異抄〕／『註釈版聖典』八三五頁

という言葉がありますが、信があればおのずと念仏は口について出るのだというお考えなのだろうと思います。

行重視の法然上人から信重視の親鸞聖人へと、浄土教はここでまた変節変容しています。

親鸞聖人の還相回向観

法然上人が娑婆世界から極楽世界への往相の道を付けた人であるとすれば、親鸞聖人は極楽世界から娑婆世界という還相の道を整備された人であると私は捉えています。

これも変な例えですが、山があったとして、法然上人はその山を極楽に向けて一生懸命掘り進みました。そして、ある瞬間に山を突き破って、光が見えてくる。こうして法然上人によって付けられた道を、今度は親鸞聖人が一生懸命歩きました。すでに道ができていますから、歩むだけです。歩んで歩んで歩んで行った時に、突然、絶対的な光を体験されたのではないのでしょうか。すみませんが、ここからは私の勝手な妄想です。親鸞聖人は暗闇の向こう側から極楽の光がぱっと射ってきて「うわっ！　なんだ!?!」となった。

絶対的な光というのは、絶対的な救済であり、慈悲の体験だったのではないかと思うのです。その体験を精緻に言語化し、教理化したのが、親鸞聖人の還相回向の教えではなかったかと思はれます。考えるのであります。

ですから、浄土宗では南無阿弥陀仏を「阿弥陀仏に南無（帰依）する」と理解しますけれど

も、親鸞聖人は「阿弥陀仏の方からの南無（帰依）せよとの勅命である」と理解します。要するに、親鸞聖人は「念仏を称えるということは、私が称えるのではなく、向こうから一方的に称えなさいと働きかけられている」と理解されたのでしょうか。

信心についても、そういう体験に基づいて解釈すると、こちら側が獲得するというよりは絶対的な他力の働きかけによって獲得させられる。信心さえも私が獲得したのではないということです。

往相に対して還相の教えというものを理論化していくと、そういう思想として結実していくのではないかと思えます。

大乘仏教を意識した親鸞聖人の教え

親鸞聖人はもの凄く大乘仏教を意識されていたと考えています。還相回向、菩提心、仏性、一乗思想などの用語を著書で取り上げているからです。

法然上人は「菩提心は私たちに起こせるはずがない」と否定されています。もちろん、菩提心

それ自体の価値を否定しているのではなく、念仏を称えて極楽に往生したら、極楽で菩提心が芽生えるのだと仰っているということです。だから、娑婆に住む我々が今できることは、とにかく念仏を称えることだということです。

これについては、梅尾明恵あたりから「法然は、大乘仏教で最も大切な菩提心を否定しているだけしからん」と批判されました。法然上人が亡くなった後、親鸞聖人は批判に応えるため、あるいは法然上人の教えをより完璧に近づけていくために、色々と理論武装をしていきました。そして、親鸞聖人は「仏から回向された信心が菩提心である」という風に読み替えていきます。

親鸞聖人の書物を読むと、仏性の問題もかなり取り上げられています。「教行信証」の真仏土巻には『大乘涅槃経』の引用が大量にあります。

五逆罪を犯した人・正法を誹謗した人・一闍提と言って善根を断ち切られた人、これらの難化の三機という教化しがたい三種類の人々がどうしたら往生できるのかということ、親鸞聖人は真摯にお考えになられています。

それから、一仏乗の思想です。「法華経」の一仏乗思想に基づいて誓願一仏乗を打ち出されました。誓願こそが仏さまの説かれたかったことであり、結局はそこに全部収まるんだと、そんな

風にお考えになられたということでありませう。

このように、還相回向、菩提心、仏性、一乗思想と、どれを取っても大乘仏教の中では非常に重要な教えを打ち出していかれました。

おそらく法然上人は、こちらから向こうに道をつけることで精いっぱいだったのだと思います。ですから、こういったことについて細かく理論化されているわけではありません。そこが当時の仏教界で取り上げられ、批判の対象になったのでしょうか。

親鸞聖人としては、自分の師匠が悪口を言われているというのが気に入らなかつたのでしょうか。何とかしたいという思いもあつて、法然上人ができなかったところを補つて、また新しい浄土教を打ち立てられたのではないかとこの風に思うわけでありませう。

親鸞聖人の改読

親鸞聖人の仏教解釈の特徴は改読です。従来の伝統的な読み方を改めて、そこに新しい解釈を加えていくのです。

先ほど紹介した南無阿弥陀仏もそうです。普通に読めば阿弥陀仏に南無する、帰依するという事なんですから、親鸞聖人はそこに自力の匂いを嗅ぎ取って、いやいやこれは自分がするのではないと、阿弥陀仏に南無せよと阿弥陀仏が私たちに仰っているんだと解釈を変えていきました。

『浄土論註』あるいは菩提心の深心の積も独自の絶対的な他力の教えに従って読み替えていきます。これは親鸞聖人に漢文の能力がなかったから変な読み方をしたと言うのではなく、絶対的な阿弥陀仏の慈悲・光・救済の体験があり、その体験に基づいて、従来の仏典を解釈していくとこう読まざるを得ないんだということで改読されて、新しい解釈もそこで付け加えられているのだと私は思っています。

対機説法

最後に、対機説法ということについてお話しいたします。浄土教に限らず仏教自体が対機説法の宗教なのです。

時機相応という言葉があります。「時」というのは時代、そして「機」はその時代に生きている人々の能力のことです。仏教は、「時と機に相応しい」ものに変わっていくものなのです。

日本で言うと、一〇五二年が末法という絶望的な時代の幕開けでした。その時代に、どんな仏教があり得るのかを法然上人は真摯に考えられたのです。そして、念仏往生、専修念仏という教えを切り開いていかれました。それを受けた親鸞聖人もまた自身の体験と照らし合わせながら、浄土教を精緻に理論化していったのであろうと思います。

対機説法は、今風の言葉で言えばカスタマイズです。その時代に住む人々の能力に鑑みて、真理の世界と人間の世界を上手くチューニングして合わせていくのです。ここに、法然上人も親鸞聖人も、お心を砕かれました。

それぞれの時代によって、求められる能力は違ってきます。法然上人の場合は、罪惡生死の凡夫、つまり悪人が往生する道が閉ざされていたところに、「念仏往生でいいのだ」と往相の道をつけられました。そして、次の時代の親鸞聖人は、絶対的な光の体験を還相として理論化していました。お二人は、それぞれの時代に与えられた使命を果たされたのだと思います。

先程も申しましたが、日本の場合は教祖を点として考えていくのが常態化していますが、そう

ではなく、思想というものはその時代や地域によって影響を受け、また、自分が誰と出会ったのか、どの仏典と出合ったのかということによっても大きく変容していくのです。このような「流れ」によって思想を押さえていくということが重要なのではないかと思っています。

そのようなわけで、今日は善導から法然、法然から親鸞という流れで浄土教を整理してみました。

仏教を脱皮させる努力

法然上人にしても親鸞聖人にしても、その業績は素晴らしいものです。その教えをそのまま褒めたたえていくということも、それはそれで私は否定しません。しかし、どうも、そこで止まっているような気もいたします。

これは自戒の意味を込めてですが、もう一度、法然上人あるいは親鸞聖人の教えを現代的に脱皮させる努力をしているのかを自分自身に問うべきだと思います。

末法の幕開けの時代の浄土教をそのまま受け取るだけではなく、科学技術が発達した現代社会において念仏往生が一体どういう意味を持っているのかをもう一回考え直し、変容させていくと

いう努力を私たちが怠るならば、浄土教は過去の宗教になってしまうのではないのでしょうか。

親鸞聖人がご誕生されて八五〇年、立教開宗から八〇〇年です。もう一度、親鸞聖人の教えとは何だったのか、これからどう脱皮させていくのかを考えていかないと、仏教は死滅してしまうと思います。私は浄土宗の人間ですから法然上人の教えとは何だったのかと置き換えることになりませんが、そこを考えていく必要があるのではないのでしょうか。

鎌倉時代に法然上人、親鸞聖人が異端児として当時の仏教会に非をとなえた精神を我々は受け継ぎ、この停滞した仏教界において、もう一度教えを脱皮させていくような教えを模索する努力を忘れてはならないかと思えます。

是非、ともに力を合わせてこの難局を乗り越えていきましょう。ご清聴ありがとうございました。

【文責宗教部】

まずは、本書の刊行にあたり、快くご協力いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

今年には龍谷大学を含む社会全体が、通常運行への第一歩を恐る恐る踏み出した年だと言えるでしょう。コロナの猛威が衰えたわけではありませんが、それでも社会全体として通常の生活を取り戻そうと、みんながそれぞれの立場でできる限りのことに取り組んでおられるように思います。

私たちが取り戻そうとしているものは、ずっと受け継がれてきた変わらない日常です。

今号では、先生方がそれぞれに受け継がれてきた想いや、受け継いでいく営みについてお話をしてくださいました。

この冊子を通して、多くの人が、受け継いできたものの大切さに思いをはせていただくことができたら望外のよろこびです。

また、今号からUDフォントを採用し、少しでも多くの方が親しみやすいように体裁を見直しました。これもまた受け継いでいくための工夫です。

(宗教部)

うけつがれるもの

「りゅうこくブックス」 No. 137

二〇二三年十月十八日発行

編輯
発行 **龍谷大学宗教部**

〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67

浄土真宗の源流	佐々木義英
葬儀にお坊さんは要らない!? —元葬儀スタッフ僧侶が語る裏話—	三ヶ本義唯
地上最大のロボットと阿弥陀仏 ～知り尽くすことと慈しむこと～	井上善幸
病院で活動する宗教者たち	打本弘祐
「マトリックス」の世界 —唯識無境について—	早島 慧
法然と親鸞：二人の功績を考える	平岡 聡

